



ここに、何十年もの遙か昔に遡る、私の臨床経験の実録(メモワール)を皆さま方に公開するにあたり、まずは始めに、その前置きとして、<私語り>を一つお聞きいただきたい。

振り返れば、私はずうっと或る探し物をしていたようだ。その探し物とは、1972年のタヴィストック(ロンドン)留学以前に遡る。若かりし頃の或る時期、私は西田幾多郎著の『善の研究』を読み耽っていた。当初、大學受験を目指しての半強制的な学習に心身ともに消耗していた。それから解放されたところで、無性に己の内に渴きを覚え、それを満たすものとして真っ先に手にしたのがそれであった。なぜそれなのか、誰に薦められたわけでもないのだから、不思議なのだが…。勿論、とてもじゃないが読めない。歯が立たなかったというのが正直なところ。当時流行っていたマルチン・ブーバー著『我と汝』のほうの方が分かり易かった。だが、茫漠とした印象のなかで、そこに書かれてあった「生命の捕捉」という言葉に痛く魅了された気がする。それに吸い寄せられながらも、一瞬何やら眩しい物を眼にしたふうに眼を逸らしてしまった。私の意識はそれを掴み取れなかった。だが、何か自分の感覚にフィットした。それこそが自分に欠如している何かなのだという自覚がぼんやりとあった。つまり自分が生命を掴み損ねているような、己の内に生命を孕めない、抱えきれないでいる、そんな難儀をわが身内に覚えていたようだ。すなわち、当時の私は幾ばくかの倦怠感というか、物憂さを隠し持っていたように感じられる。これは、受験勉強の味気無さにとことん嫌気がさしていたからということだけではなくて、生来斑氣で型に嵌められることが死ぬほど厭だというのが、実に私の本質のうちに伏在していたせいであろう。

幼い頃から一応はタテマ工的には優等生でクラスではリーダー格であったりもして意気軒高な印象なのだが、その反面どうやら常に屈託があるような気配がうかがわれた。担任の教師たちが「通信簿」のコメント欄に、励ましとともに、私についてそうした評価の言葉を書き残してくださっているところからしても確かに、やはり彼らの目に映っていた自分はそうだったろうし、それが自分だったと振り返って納得できる。それはずうっとそうだった気がする。勿論のこと、タヴィストック留学に関して言えば、当初自分のなかの不全感が直接の動機といった自覚はまるで希薄で、専門的技術を修得すべく精神分析的訓練を受けることに果敢に挑んだつもりでいた。だが内心薄々気づいていなかったわけではない。今振り返って、「生命の捕捉」こそ彼の地での私の課題であったと考えられる。しかしながらその探し物は、真の意味ではついぞ見つからなかった。内にも外にも…。それで、七年余りの滞在を経て、ますます妙に自分が片付かない思いを背負って彼の地を辞したふうな具合であった。

そして、ここで一つ、帰国後間もない頃の或る出来事に思い至る。私は或る参禅会に赴いた。老師をはじめ、多くの方々とご一緒に坐禅というのは初めての体験であった。その第一日目のこと、ひとまず坐禅の恰好をして、瞑想に入った。しばらくして、何やらとんでもない事態が己の身内に生じてるのに気づき、泡を食った。まるで水底深く引きずり込まれ、きりきり舞いするような、異様な圧迫感を

覚えたのである。意識が朦朧とし、あわや溺死寸前かといったところで、私は体を翻し、どうにか手近な何か、綱のようなものを手に掴んだ。それを手繰り寄せながら、私はどうにかそこから浮上し、事なきを得た。息を整え、自分が坐禅の真っ只中悲鳴をあげるような醜態を晒さずに済んだことに安堵した。それにしても、我ながらこの体験がひどく訝しかった。この押し潰されそうな感覚は何事か！つくづく自分が何とも難儀に感じられた。やはり生命が薄いというか脆い^{もろ}というか、とことん‘芯がない’と自覚するしかなかった。己の存在根底の不確実さに震撼したとも言えよう。かくして私にとって「生命の捕捉」は己にとっての一生の課題とも思えた。が、同時に、たまたま私は精神分析家であり、従って私が関わる分析患者のそれぞれ一人ひとりの「生命の捕捉」が私の課題ともなっていく。これは、私の「願掛け」と言ってもいい。「精神分析への信(faith)」が問われていた。それに「生命の捕捉」がどう絡んでゆかかが試されていた。まさにこれこそ「私独自の精神分析」になるはずのものではなからうか。そうした直観が動いた。であるから、とにもかくにも、分析セッションの場で、相手して下さる患者さん一人ひとりに対して向き合うことでしかない^{いぶか}と覚悟を定めていったように思われる。

近頃になって、ようやくその永年の「探し物」が見つかったのかも知れない。「生命の捕捉」、それに「精神分析への信」もまた・・・そんな気が始めている。『善の研究』のなかに＜自己の中に自己を映し、自己に於いて自己を見る＞ということばが見られるが、これをさらに＜自己の中に‘他者’を映し、自己に於いて‘他者’を見る＞と言い換えてみればどうだろう。この自他一如的了解、それが臨床の場に於いて分析対象(他者)への呼びかけ・語りかけとなり、すなわちこれが私の分析家としての「働き」になる。そしてこの働きかけは、分析対象のなかに或る種の「自覚」の覚醒を促していくようであった。

さて、この「自覚」とは何かということだが、永年分析臨床に携わりながら一つ不思議に思うことがある。それは、人とは誰しも「自分を証し^{あか}せんとする生きもの」ではなからうかということ。どうやら人は「自証」しながら覚知へと導かれてゆくものらしい。従って、個々それぞれの内なる「自証的覚知」へ向けてとことん接近を試みることで、それが紛れもなく「生命の捕捉」に繋がると、私は考えた。それが私の分析家としての揺るがないスタンス(姿勢)である。しばしば思うことは、人には＜知って知らない自分・知らないで知ってる自分＞というのがある。究極的には、それらいずれもが「知ること(覚知)」へ繋がられてゆくことが精神分析の眼目となろう。自己の内なる光と闇のせめぎ合い。そして心の背^{そむ}きから立ち還りへと、すなわち「生命の捕捉」へ向けて・・・やがて混迷を潜り抜け、右往左往が止まる。もはや‘迷子’ではない。＜ここでいい、これでいい、私は今ここに居る！＞といったふうに、自らの立ち位置が個々それぞれのなかで定まってゆく。そのように私の語る言葉が、分析患者たちの内的動勢を牽引し、また跡付けてゆくように思われたのである。

私の個人的感慨だが、セッションのなかで私から分析患者への応答として「語りかける言葉たち」が一体どこから来るのか、折々に不思議を覚えることがあった。何故今ここで、これらの言葉なのか？ 予め考えられた言葉では毛頭ない。目の前の相手に語りかけながら考えてゆくのであって、それ

で自然に言葉が口を衝いて出てくる。それは＜自分の中に自己（他者）を映し、自己に於いて自己（他者）を見る＞場所から来るものとしか説明しようのない何かであり、しかも時折それは自己を‘超越している’といった感覚を密かに覚えることがあった。閃きの訪れに震える一瞬が…。すなわち、自分一人では決して解ろうはずもない・語れるはずもないこと、それが分析臨床の場では二人という共同的交わりに於いて互いに呼応し合うなかで、想定外にも私という自らの常識的な「枠組み」を突き破る瞬間がある。互いに互いが照らし照らされ、映し映され、包む・包まれる中で、＜私が弾ける！＞その一瞬、これこそが分析家としての醍醐味と感じられた。事実そうした瞬間も滅多に体験されることではないのだが…。

ところで、1980—1990年代の或る時期、私は分析セッションの記録の詳細を書き留めることに専念していた。帰国当初はまだまだ日本語がたどたどしかった。思考回路が英語であったから、どうか日本語に切り替えなくてはというのがあり、とにもかくにも臨床の場で使える日本語を模索していた。日本語の「精神分析言語」を開拓しなければならなかったわけだ。セッションのなかで相手して下さる方々の反応の手触りを、おっかなびつくりの及び腰ながら、届くかな、どうかしらって手探りをしながら、吟味していったと言える。いつかどこかでそれらの記録を公開することなど念頭にはなかった。ただその当時の自分の置かれた状況の限界を見極め、さらにはそれをどう乗り越えてゆくかであり、取り敢えず「声にされたもの」を書き記してゆく作業に没頭した。でも正直申せば、ひたすら私の発する言葉たちが私には面白かったからであり、その不思議さに魅了されていたとも言える。帰国後の私は、パーソナルアナリシスもスーパービジョンも期待できない、まったくの孤（個）の状況であったから、それら臨床記録を書き綴ることがその‘代替’となることを内心願っていた。すなわち自分の発する言葉たちはセッションのなかで分析患者へ志向されたものであっても、それに負けず劣らずそれらは我が身に届けられていた。「心の養い」として…。そんなふうに分もまた、分析患者さん共々、内なる「自証的覚知」を耕すことに懸命であったと言えなくもない。彼の地での分析体験はひとまず棚上げされた。クライン派精神分析的な‘ことばの種’は、確かにメルツァーを始めとする諸氏によって、特にはマーサ・ハリスだが、私のなかに蒔かれたといえるが、それらがいつか私のうちで醸成され、日本語になって甦るのには時間が掛かるということは覚悟されていたのである。

さて、惜しむらくは、いつの頃から精神分析は目で読むものになってしまったのであろうか。そもそもそれは活字ではなかったはず、耳で聴かれる音声であったのだ。即ち‘声’なのである。それも直接的に誰かに今・ここで自分に呼びかけられる・話しかけられる声なのである。この分析の原点に立ち還るにはどうしたらいいのだろうか？ 今や臨床の場に根差したところの精神分析の「臨床言語」というものの復活を問いたい。そして、そこから新しい《日本の精神分析》が創造されることを願う。

自分に話しかけられて自分の耳で聞くのではなく、誰か一般に話しかけられたのを目で読むことは決して同じではない。それも概念的に纏められた概略（あらまし）では自分が棚上げされてしまう。「自分ごと」になるはずがなからう。それが自分事ではなく、他人事でしかないとしたら、「生命の捕捉」

は望めまい。そんなふうに精神分析は疲弊し、衰微してゆく。ここでぜひともマーサ・ハリスのいうところの「awe! (おやまあ！ 凄い！)」の驚き、そして感嘆が欲しい！

概して、分析セッションの「生の資料 raw-material」、すなわち詳細な逐語的記録というのは、症例報告としていずれ論理付け・筋立てされ、構成されたかたちで論文の体裁になった時点では用済みとなり、破棄される運命にある。だがふと思った。あれら「語られた言葉たち」、分析セッションに於いて語られ、そして聞き届けられたであろう、あれら分析の場に深く根ざした言葉たち。それこそが真に‘生きたもの’すなわち精神分析の「いのち」ではないかと…。それらいのちが辿った、その後の行方を追うことなど詮無いことだろうか。どうやらそうとも言えないような気がしている。どこかでそれらが誰かの中で尚も生きて、彼ら一人ひとりの自己生成を照らす‘映し鏡’として何らかの働きをしているに違いないなろうといったふうに…。はたとそうした考えが浮かんだのには理由がある。

実は、ごく最近のこと、或る方から、それはもう20年近い過去に遡るが、3年ほど私のもとにお通いくださった元分析患者の方なのだが、こんなメールを頂戴した。〈山上先生には本当に感謝しております。私には私自身で人生を決め、生き抜く能力があるという自覚を頂きました。これからもご健勝であられますように…〉とのことだった。ホー！と思った。なるほど、かつて彼との分析セッションに於いて「語られた言葉たち」は、この歳月彼の中で意味を持ったのかと、感慨深いものがあった。

それで、何やらふと思立って、『過去の分析症例』のファイルを探した。すっかり忘れていたが、その昔ワープロのフロッピーに保存していたはずなのを思い出したのだ。そして、あった！そこには時間の経過で色褪せることのない、龐大な量の「語らい」が記録されていた！それら一般の方を対象とした「分析治療」の逐語録を読みながら、分析患者一人ひとりが実に掛け替えのない「値打ち」として私の胸を打った。何かしら愛しい^{いとわ}といった感覚に心揺さぶられた。これが嬉しくも「生命の捕捉」に繋がった！それで思いがけなくも、ふと心が動いた。それらの記録をごく一部にしろ公開することは、私の提唱するところの《語りかける精神分析言語》を例証するものになりはしないかと…。多くの方々からご批判を仰ぐのもよい。それも意味がなくなろうと考えたのである。

そう言えば、東京・原宿に於いて1980年以降個人開業を始めた当初から、私の胸裏には《心のことば—‘個’^{うた}を謳う》というスローガンが秘められていた。精神分析がいつか我国で市場価値をもつことの是非はともかくとして、それが所詮ごく僅かな一握りの人のための恩恵でしかないといった悲観は斥けたい。日本の行く末を思うとき、やがてこの私が彼の地から此地へと運んできた「ことばの種たち」が大きく芽吹き、さまざまな対人援助のフィールドに於いて、そして家庭内に於いても、‘草の根的に’浸透してゆくことが期待される。今やポストモダンの世相にあって、そうであればこそ尚更にわが‘内面’に目覚めた「心のことば」は希求されているとも言えよう。「‘個 individual’の覚醒」というのも然り。どうしても《心のことば—‘個’^{うた}を謳う》というスローガンに尚も私はこだわり続けたい。存在は言葉なのだから。人が言葉と手を携えて生きてこそ、そこに‘わたしの未来’は拓かれてゆく。畢竟する

に精神分析とは、己を活かしも躓^{つまず}かせもする内なる言葉、それが何かを尋ねんとする内的衝迫を擁護するものなのだ。語られねばならない・聞かれなければならない、そんなくわたし)がいる、そしてくあなた)がいる！ そうした想いが、もう夢のようにも思われる、昔々の一般の方々との分析治療セッションが書き留められた記録から再び躍り出た！ここで改めて、人が誰しも潜在的に有する「自証的覚知」が涵養される場として、精神分析というものへの信頼が実感されたと言ってもいい！不可思議な「心なるもの」、その《形なきものの形を見、声なきものの声を聞く》ことの意識的営為が、さらには「実存」の目覚めといったことが希求されてゆくことが望まれる。

そして、もしもどなたかがこの＜分析セッション・メモワール＞をそのようなものとしてお読みくださって、それでどうも秘密めいて七面倒臭いもののように見られがちな精神分析に新たな関心が向けられるとしたら、それは、これからの我国に於ける「精神分析の草の根運動」を底支えし、その牽引力にもなろうかと期待される。

近頃、陽射しが心地よい。外を歩いていると、道端にたんぽぽの黄色い花が咲いているのが目にとまる。すぐそのお隣にはすでに綿帽子になったたんぽぽさんもいる。私は何だか嬉しくて、思わず笑みがこぼれる。たんぽぽの種たちが風に吹かれて、舞い上がる。さて、それはどこへ飛んでゆくやら…。そしてどんな芽生えになるやら…。もしかして私によって「語られた言葉たち」もそんなふうだったらと思うことに大いなる慰めを覚えた。そもそもそれがこのWEBサイトの意図でもあったのだから…。

最近、頓に「コレスポンドス(照応)」ということばが胸に響く。誰も一人では生きていない。私達たちは、たとえ目に見えずとも、絶えず誰かと繋がっている。どこかで誰かが自分と同じような想いを抱えながら生きている。耳を澄ませば、それら心の懊悩、叫びやら呻きも聞えてくるようだ。互いに呼びかける声が求められる。それぞれに‘想い’が表現されることこそが待たれている。どこかでくあなたの出番ですよ…>の音が聞こえる！

ここに、この＜分析セッション・メモワール＞をあなたに捧げましょう。それらかつて遠い昔に私と誰かとの二人の交わりのなかで「語られた言葉たち」が、もしかしたら今あなたに出会えるかもしれない！そう願って…。どうぞご覧になってください。(2017/05/05 記)

〔註：下記の＜分析セッション・メモワール＞には、前半に5名の女性、後半に5名の男性、計10名の方々の分析セッションが纏めてあります。ご登場いただく元分析患者の皆さま方についてですが、お断りするまでもなく、お名前は実名ではありません。適宜に私が名付けたものです。また、その性別及び年齢を除いて、個々人の背景などは一切記載がありません。ご了承ください。尚、括弧＜ >内が山上によって「語られた言葉たち」になります。〕



メモワール・その1 分析患者:あかね 女性 33歳

或る日のセッションでのこと。月刊雑誌『昴』の今月号を手にしたが、やっぱり自分の投稿文は載っていなかった、と失望を笑ってごまかす。そりゃそうだ、結構レベルは低くはないのだと改めて変な感心をしたと語る。〔微かに、「やっぱり振り向いて貰えなかった」といった苦々しさが伝わる。〕そこで、<『昴』=元恋人Sということでもともとに相手されなかった失望感はあるとして、そもそもは、たとい片思いにせよ、『昴』を相手することで、何か良いものに自分が^{つら}列なることが出来るかも知れないという趣旨から出発したことだから、せつかくのものを奪われる必要はなからう・・・>と示唆。

さらに、<言葉を通しての表現の追及とはたぶん、絵画とも違う困難があるかも知れない。それは過去について忘れていたいことが蘇ることの辛さでもある。が、一方で新しい発見によって消されていた「いのち」が蘇る、そうした喜びもあるかも知れず、さてその両方を天秤に掛けたら、あかねさんの場合どっちに重く傾くかしらね。更にそれ以上に、言葉は「未来」を含むものであるからして、それによって自分を舵取りし、またそれを武器として自分を形造ってゆくことも可能と考えて良い。つまり言葉があったが故に、それがなかったらあるはずのない自分が生きられたというような具合に・・・ね>と指摘し、投稿の継続を励ます。

「編集後記」にも、たくさんの人からの投稿があって、総てを掲載できないのが心苦しいと田中という編集長が詫びを一言言っていたので、自分に言われたような気分でもあり、皆が諦めないようにとちゃんと気遣いしている、と彼女笑う。今月の課題が「卒業」。そこで、頭に浮かんだのが「処女喪失」という言葉。昔から「喪失」の‘失う’にこだわり、抵抗があったと語る。一人前の女としてのある意味‘入学式’的な肯定感を強調しようとする。<どうやら性的関係における‘あげた’とか‘もらえた’とかの意味合いが一切否認されているようね・・・>と示唆。それはむしろ、奪った・奪われたという感覚なのだ、と彼女語る。<何か良いものを自分は人にあげられるということが、また人にあげられる何か良いものを自分が持っていることがまるで否定されているような・・・>と示唆。取り敢えずからだを投げ出していれば、関係は持てる、と彼女。セックスの後、誰も「良かった」とは言わなかったし、又自分がそれを敢えて聞くこともなかった。たとい良かったと言われたとしても、自分が相手になれる訳ではないのだから、確かめようがない、と彼女取り付く島もない。これ以後、結婚しないでセックスをすることはないから、当分ない訳だから、それでこころ安らかな心境にあるとも語る。<セックスも二人の間でのやり取り、‘あげたい’も‘貰いたい’も一切合財要らないとすれば、それ程清々したことはないわね・・・>と示唆する。<誰も要らない、自分一人で片を付けられるということ。そしてここに至るために、真にその為にこれまでの何十年もの間生きて来たことにならないか・・・>と指摘すると、そう思うと彼女返答する。

ここでふと何らかのからだへのコンプレックスかと予感されたので、彼女が以前ブラジャーがCカップだという話をしたのに言及し、つまり大きなオッパイだということだとすれば、それは男にしたら好

ましいということになりはしないかと尋ねると、「厭がる人もいますよ」と事もなげに却下されてしまう！
小さい頃太っていたから、オッパイ大きいと太っているのとは同意語で、自分にとってそれが殊更いいものという印象はない、と彼女。「からだ」への嫌悪感がある。時折、風呂場で裸の自分を見ながら、気味悪く感じる。何故指が5本なのかと思ったり・・・と語る。男の体についてはどう？と尋ねると、「グロテスクですね」という言葉が返って来た。「でも、それを自分は追い求めた」と付け加える。それは自分の幻想を守る為だったように今思う、と洞察する。それはすなわち、自分が誰のものでもない、掛け替えのないものであり、誰の影響からも自由であること。(過去に)親にも、先生にも、友達にも「痛み付けられた」という思いがあって、どんな仕打ちを受けても、もはや痛まない・感じない自分にならなくてはと決意した旨を語る。＜そうした帰結にたどり着く迄に、何十年も掛けて、元恋人Sを始めとして多くの人たちを必要として来たということ。すなわち彼らは、彼女にとって、自分を「痛み付ける者」でなければならなかったということになるわね・・・＞と指摘する。そう言えば、子どもの頃、アイスクリームを道端で落っことして、悔しくて、足でわざわざ踏み付けたことを覚えている、と彼女語る。＜「煮て食おうと焼いて食おうと私の勝手よ！」の私を自分の手の中で握って放したくないあかねさんがどうやらいらいたいと示唆。ここに至って満足かと尋ねると、それを彼女否定する。＜ここに『エホバの証人』とのつながりが意味を持ち、そこに慰めを見いだそうとするあかねさんののだろうか、それが問われるわね。しかしながらここで気掛かりとなるのは、建前で本音が語られていない、切り捨てられている。その分、自分の気持ちから自分がはぐれていはいはしないか？ ただ機械的に、そう言わせられて、そう言ってる自分。そう思わせられているから、そう思ってる自分。自分で分かっていることを分からないことにしている自分。それを、「記憶にございません、覚えがありません」で、なかったことにしている(チャラにしている)自分がないかということ。自分がもらえたもの、それが本当に良いものならば、あなたの中であなたを生かし、そしていいものを生み出す創造的な力となるだろうに。それが挫かれるとしたら、何故かが問われるわね・・・＞と指摘する。自分の見たいものだけ見て、見たくないものを見ないようにしてきた自分がいたのだ、と彼女語る。詰まりは、自分の都合のいい鑄型に相手を嵌めていたということかしら・・・と問うと、そう、嵌めることしかしようとしなない。嵌まらない部分は、無いものにするんだ、と彼女返答する。

母親は決してみじめな自分を認めない。自分は不幸じゃなかったというのが彼女の信条だから・・・とやや椰楡気味に語る。＜確かに、あの時代、誰でもが大変だったとしたら、自分は特別じゃないと言うのも、もっともかも知れない。ご立派じゃないですか・・・＞と示唆。＜いつも自分が何か人にあげたい、そういうお母さんがいるのよねえ＞と示唆。そう、それで友達も多いと彼女認める。＜でも何故かあなたにはそれが気に入らないのね！？何故なのだろう。虐げられた者の虐げられた痛み故の「ごまかしごまかし生きている姿」をあかねさんは告発しているのだろうか？！ それなら、あなた自身はどうなんだろう！「ごまかしごまかし生きていない」と胸を張って言えるかな。確かに、「ごまかしごまかし生きればいじゃないの！」と囁くあなたと、「ごまかしごまかし生きてなどいたくな

い！」と叫ぶあなたと、内側で格闘しているわね。詰まりのところ、執着・愛着を持つべきものに本当に執着・愛着できる自分があるのか、こだわるべきことに本当にこだわってきたのか、それともまるでそうではないのかが問われる。そして、どうも「はぐらかす自分」と「はぐらかされる自分」のどちらもが自分の中にあるらしい・・・>と示唆する。

さらに、<不思議に思うのだが、ここではあなたは自分で解っていないながら解らないとすることを、山上先生に解らせようとしているわね。それってまるで五里霧中だから、当たり外れはあるものも、何とか私の立場で解ることは、その都度あなたに伝えてるわけだが、果してあなたがそれをどう引き継いでいるかが問われるわけで・・・。いずれにしても、それが何であれ、万事何のわけもなしに闇雲にやっているのではなく、総てわけのある脈絡の中で自分が生きていることを、もっともって見据える必要がありそうだわね・・・>と指摘して終える。



メモワール・その2 分析患者:いわね 女性 30歳

或る日のセッションでのこと。私って外側の顔が神経質でキリキリしてるように見えるらしい。自分としては、こうあるべきという振る舞いをしてるんですけど・・・と彼女語る。<それも誰彼の意向を汲んでいるというわけでもない？ 倫理・道徳・規範といったものを基準にしてるだけだとしたら、つまり誰かに付き合ってなどいない自分でしかないわけね>と示唆。とんちんかんだ、と彼女。<確かに、そもそも倫理・道徳というものが、誰しも一人ではない、誰かと共に生きること、それを前提にしてるとしたら、とんちんかんになるわね・・・それだと、彼らの仲間の一人になれない、擦れ違っている、「ここに居ていい私」にはならないわけで・・・。そして、孤独・孤立の中で、置いてきぼりくらってるいわねさんになってはいないかしら・・・>と指摘。それで損した、馬鹿みたといったがっかり感はあるのかと訊くと、それはないと彼女否定。<付き合ってる・付き合ってもらってるという感覚がない。即ち、そうした期待感もないということかしら？>と示唆する。

どうせ相手は私を聞いていない。皆誰も自分のことばかり聞いてもらいたがっている。こちらは相手を解るのに、相手はこちらを解らないらしい。怪訝な顔される。聞こうとしていない。「解ると解られる」で、相手とこちらが50%と50%ならいいが、いつも相手は100%求めるから、自分の方へ侵食してくる、と訴える。線引きする必要があるのは解るし、こっちにも責任があるとは思うのだが・・・と、彼女悩ましげな風に語る。<解られるためにも解らせるためにも互いに辛抱が要るわね。ここで問題なのは、相手に自分を解ってもらうのに辛抱してもらう値打が自分にあるのかどうなのかということかしら？率直なところで「ねえ、解ってよー、聞いてよー・・・」がもっともってあっていいのではないのか。つまり求めていい、欲張っていいということかしら・・・>と示唆。

欲しいというのを自分に言わせないようにしてきた。買ってもらったら、それは貰うけど・・・言ってもダメだからと先取りして自分を諦めさせてきた。一度言ったら、こっぴどく叱責されたから・・・。そんなに言わなくても・・・という思いがあった。いつもいつも買ってもらうことばかり・・・とか言われ続けた。

それにいつも何か欲しくて買って貰っても、しばらくして飽きる。だから本当はそれが欲しいのではない、ただ‘買ってもらいたい’に執着してる自分がいるだけと分かったから・・・と説明する。

＜未熟で親とも言えない親の代わりに自ら親代わりといったいわねさんがいて、そういう自分をうまく宥めずかしてる。母親にしてみれば、自分が不安で心細くて、ついつい長女であるあなたに当たったということか。そうした余裕がない母親を庇う必要があったということかしら？＞ そう、確かに不安とか余裕のなさをそのままぶつけられたって気はする、と彼女。＜親子間での逆転劇とも言えるかな？そこで問題なのは、あなたは偉いねえというねぎらいがないことだわね＞と示唆。アンタを犠牲にしたと母が私に言ったことがあるが、そこ止まりで、それ以上はない。母親が自分の感情を語るのを聞いたことがない。プツンしてる。直接的に、相手の気持ちに触れるということが一切ない、常識の人というか、かくあるべしというものに固執しているだけ・・・と彼女語る。

＜だとしたら、かつての母親との方がまだ関わりあってたと言えるかな。今では扱いやすい母親ではあるが、どうもそっちはそっち、こっちはこっちという感じではないか＞と示唆すると、(お母さんのこと)時折忘れていて、と彼女返答。＜でも親を見限らなかつたわね。捨てても良かったのに捨てなかつた。何故なのかな？＞と訊く。捨てていたら、別の人生になっていたかも・・・と彼女。＜そう確かに・・・それが良かったかどうかは誰にも言えないが・・・＞と示唆。＜でも親に欠けているものがあり、それを自分が代わりに先取りして補ってやってるということは、有って然るべき何かは何なのか分かるということだから、すごいよね＞と示唆すると、何となくそれってイメージはできるが、実感はない、経験してないから・・・と彼女素っ気無い。＜それは、誰かにとってはアルもので貰えるものだけど、いわねさんにとっては手の届かないもので貰えナイものになってるのかな？＞と示唆。母親はちょっとは私を犠牲にしたというのがあるけど、叔母などにはまるでない。私が一体どう思われているのかさっぱり分からない。自分ばかりがどうでこうでと、つい(自分こそ)してあげてるという話しになる・・・と彼女。「補助自我」という言葉を挙げて、＜彼らにとっていわねさんはまさに‘自分の用途’の延長上にある、自分の一部でしかない。自分ができないのをしてくれる、考えられないのを考えてくれる、感じないのを感じてくれる誰かという意味・・・。それ無しでは彼らは破綻していたかも知れない。つまり彼らの生存を支えるものとしていわねさんがいるということになるかしら？＞と問うと、一度出ようとしたら、恩知らずやらとんでもないことを言われた。自分がそんなに悪いことしたのかなあと思った、と述懐する。＜離反することへは報復があるというわけか？でもここで問題になるのは、犠牲になることに甘んじたいわねさんがいて、彼らの思惑に嵌まったということ。これをそしてここを選びたくて選んだという意識が彼女にあったかどうかということ。まるで(自分なんてあいつらに)くれてやる、どうにでも勝手にしてよと身を彼らに預けたいわねさんがいる。自分を選ぶことを求めたことを諦めたのだろうか？それは当時女として自分が選ばれ求められることを諦めたということでもあるかしら？＞と示唆。そうかも知れない、でもそうだとすると、どうしたらいいのか分からない。彼らなしに生きられるのかどうか不安な自分もいるし・・・と彼女答える。

<「あなたはあなたでいい」と言ってくれる自分の味方、力添えしてくれる誰かに飢えていたわね。確かにその点これ迄大いに見過ごしにされてきたとも言えそうだが、でも誰がどう思おうと、「私は私を見捨てなかった・見限らなかった」と言える、そんな確証が欲しかったいわねさんなのではないか。それがあなたにとっての『精神分析』の意味だったわね・・・>と指摘。‘元’というか、‘核’というか、これだけはやらなきゃいけないことだという気がしていた。人が認めてくれるからじゃなくて、自分がこうしたいからというのが、欲しかった・・・と語る。<確かに、人に認められることを諦めることはない。でも今のいわねさんには自分を誰かにお薦めできるという心境じゃなさそうなのね>と示唆。さらに、<「捨てられてきた私、捨ててきた私」、それを取り戻すことがまず先決でしょうね。自分の視野の中でのあれやこれや、見ていて見ていないことになってる、聞いてて聞いてないことになってる、分かっていて分からないことになってる、つまり有っても無かったことにしているあれやこれや、そうした自分の実感をどこまで把み直してゆくか、それがここでの課題になる。まずは「選びたい・求めたい私なるもの」の欠如が問題となっているという認識から出発すること。そこでは「選びたい・求めたい私」の回復が問われている・・・>と指摘して終える。



メモワール・その3 分析患者:えり

女性 27歳

或る日のセッションでのこと。しばらく沈黙してから、まるで岩がゴロンゴロンと転がって来ただけ、そして時間になれば、又ゴロンゴロンと転がっていなくなるだけだ、と笑って語る。<どうやら「今・ここそ」といった必然性が否認されているようね・・・>と示唆。昔のこどもの頃の「いじめ」の記憶が蘇った、と彼女語る。地面に描かれた輪の中に閉じ込められて、そこから動くな！と言われて、じっと立ちすくんだままで居たことがあったんだそう。「偶然」には乗るのが怖いから、結局動けないのだが、例えばそれが「必然」と思っても、手放してしまうんだとか・・・。いつも小さな型に嵌まっているしかない自分で、それでいつも「役不足だあ・・・！」になってしまう、と彼女語る。<言うなれば、居場所が間違っている、相手が間違っているというわけで・・・。そしてまた、自分が自分であるという所以も断ち切れていることになるわね・・・>と示唆。5,6歳の頃だが、心筋梗塞で亡くなった父親の葬式に、黒いビロードの洋服を着せられた。周囲で起こっている出来事が理解できずにいたから、嬉しくって多分はしゃいだんだと思われるが、そのことを誰かに非難されたという思い出がある、と語る。<なるほど、それで自分の言動の一切の脈絡を寸断することで、罪悪感から解放されたつもりというわけかしら・・・？> 記憶にある自分はいつでも周りの眼を気にして、過剰に反応していたと振り返る。つまり誰にもうさがられまいとして、そして邪魔扱いにされまいとして・・・ということらしい。

<実際、こどもにはこの現実が^{むご}惨すぎるとして、判らないはずと大人は思いがちだから、こどもの方も判らない振りをする場合があるが・・・>と示唆すると、大人がそう思っているのが判れば、こどもとしてもそう振る舞う外なくて・・・と言いつつ訳す。父親が火葬場で焼かれる際、当時下宿していた男の人がいて、その人が自分と遊んでくれていて、自分はそれを見なかった。今では、それを見

ておくのだったと思う。父親の死を、現実起きたこととして頭では判っているのだが、どこかでそれを
そうだとは思いつれなさいまに來てしまった気がする、と語る。＜世間の惨さ・つれなさを大人はこ
どもになるべく見せまい・聞かせまいとするし、こどもの方も、それをいいことに、それに乗っかって、見
ない振り・聞かない振りをしてきたということかしら？＞と示唆 同輩でも居れば違おうだろうが、一人
っ子では、母親にそれはこうでこうで、だから運命だと言われれば、逆らうことも出来ないわけで・・と
彼女言い訳する。自分には「過程」がなくて、「結果」しかないはずうと思ってきた。その「結果」に
しても、自分が導いたものではなくて、つまり他人の（主に母親）^{こしら}拵えごとでしかないわけで。だから
外見上は他のこども達よりも仕上がりはうまく見えても、例えば中学の時言えば「スカート押し」、
母親が毎日やってくれて、これでいいのかあと内心思ってたと語る。その当時から、それら一つずつ
を自分でして來た人達に比べると、随分差が付いてるようで、今や打ちのめされるような思いがあ
るんだとか。今周りを見渡すと、どの人も凄く有能に見える！！ 自分など、とても太刀打ち出来
ない、恥を掻くだけだ、人様にも迷惑でしかないと感じるとか・・。＜それでは、始めるまでもなく終
わっているわね。・・・先程の「過程」がないという話。すなわち‘自分のチャンス’であったものを奪わ
れたと愚痴っていたかと思うと、今度は自らが自らのチャンスを奪う算段していることになる・・＞と示
唆。＜世間はそれ程、つれなくて、^{もご}惨くてということではないのかどうか・・。「絵に画いた餅」を壁に
貼って、おいしいおいしいと言いながら、その内いずれは火葬場に行って一巻の終わりになっても、
それで誰も^け怪しからんとは言えないが、「あなたはあなたの人生を生きなくては」と呼びかける声に
耳貸すわけにゆかない、そうしたえりさんのかしら・・＞と示唆。すると、「でも、私は自分の人生を
掴みたいと思ってる！」と笑いながら、反駁する。＜まるで回り舞台みたいに、欲しかったり・欲しく
なかったり、要るんだったり・要らないのだったりだが、さあどう収まりますかしらね。火葬場に急ぐ必
要はまだまだなさそうだし、当分自分の中の‘虚しさ’をじっくり見据えることになりましょね・・＞と
示唆する。

大学の頃から「自分の色」を決めなきゃと思いだしたのだそう・・。今では灰色ぐらいには
なってる、と笑う。＜確かにもしもりさんが赤とか緑とかだとして、本当とは逆に取り違っている場
合には危険じゃないか。交通信号で、赤と緑を読み違うのが危険であるように・・。だからこそ、そう
した際には「色弱」の人が、人の群れの動きで動くのにも似たように、りかさんの場合流れに身を任
せる以外は生きる手立ては無いということになるのかしらね・・＞と指摘。

父親にからかわれたことがあったと、或る幼少時の記憶を語る。「ホンモノのえり」はおまえじ
ゃなくて、おまえは「ニセモノのえり」だというもの。壁の方に向いて、こっちがホンモノのえりだと言っ
たり、お風呂の中で手拭を空気で丸めたのを見せられて、こっちがホンモノで、そっちはニセモノのえり
だと言われたり、空気にさえも勝てない自分がいた、と苦笑いしながら語る。母親は、それを罪のな
い冗談と取り、そうした遊びを回想しては、「あなたはお父様によく可愛いがって貰ったのよ」と言う
が・・。〔どうも要領を得ない話ながら、父親の言葉に、子ども相手の^{ざれごと}戯言にしては何かしら^{とげ}’

があるように感じられた。・・」そこで、＜自分が父親にとって気に入らない存在だった、例えば後から割り込んで来た闖入者といった思いがあったかしら。そしてそこからえりさんの女の子であることからの逃げ。同時に男性一般に対する敵視並びに恐怖が始まったかな。いずれにしても、‘自己肯定感’が問題になってるみたいだが・・＞と示唆。

自分が誰かに何かをお薦めするなど、とんでもないといったことを語る。ごまかし笑いをしながら、大体いつもそう、卑屈になってしまうとか。食べ物でも、どこが何が美味いかと尋ねられても、答えられない。美味いということが分からない、たとえ美味いとその時一瞬一瞬は思ってたとしても「記憶がなくなる」と笑う。＜人に対しての迎合性もそこまで徹底できれば、お見事！確かにえりさんの目に映るものはすべてポオーツと薄い幕が掛かっている印象があるものね・・＞と示唆。絵を描くのも、デッサン力は全然ダメ。目の前のものをあるがままに描くことがまるで出来ない。全然見込みなしだそうなの。‘繰り返し’という訓練の効果をまるで否定する。それで普段描く絵はグジャグジャ、そして誰かに尋ねられたら「何描いたのか解らない、適当に描いた・・」と言っておくんだそうなの。下手なのを人の目に晒したくないと強調する。次いでに、父親が生前、彼女に「絵を描いてやろう」と言って始めるが、そのうち直に「お化けえー！」とグジャグジャの絵にして、照れ笑いしてふざけて終わるといった過去の出来事を語る。ここで彼の「ホンモノ指向」について注意を促す。ホンモノの画家にいつかはなりたい野望を抱いていたはずの父親。しかしいつかホンモノになるまでは、何もかも「ウソっこ」でしかないということらしい。そこで、「判断の基準」がないとはこれまでも頻繁に口にされたことだが、実は結構ものすごい高いところに基準を設定しているらしいこと。その「高嶺の花」に至るまでにどういう段階を踏むべきか、今の現実を測るモノサシが無い。すなわち未来に向けての通路が断ち切られているということになるかしら・・＞と指摘。

＜それで人生が、どのレースに出場したらいいか迷っている内に競技種目の総てが終了してしまっているということになりかねない。それだからと言って、困る人などどこにもいないということではないのか・・＞と示唆。ちょっと慌て気味に彼女反発し、「自分としてはちゃんとした定職を・・」と、又々いつもの同じセリフ。＜「私用の専用椅子」がどこかに用意されているわけでもないわね・・＞と指摘。取り敢えず教職試験を受けるつもりでいて、それを口実にして他は何もしないでいるのだが、受かってもとても自分じゃ勤まらないという気がすると、ここでごまかし笑いする。＜「ニセモノのえりちゃん」がここにいる、「ホンモノのえりちゃん」はどこか別のところにいるつもりかな。今なら人手不足だから、今日でも明日でもどこでも即座に来て貰って有り難がられるはずなのにね・・＞と示唆。「将来」云々、その為に定職に付かなきゃ、を彼女強調する。あれにもなれるかしらね、これにもなれるかもね・・のこちら側の示唆に、一々あれもダメこれもダメと「私はダメ」の否定を強調するばかり・・。＜どうせ私はダメ、「ご辞退致します」というもってもらしい「しおらしさ」の陰に、結局は出し惜しみしているだけではないかという思いに、何とか最後辿り着き、それで一生終わっているかもね・・＞と示唆すると、「それじゃ困る！」と彼女、悲鳴を上げる。＜でもね、単に出し惜しみしているつ

もりで、アルつもりが本当は何も「アリはしなかった」ということに当然なりかねない・・・>と警告する。
<こころ辺で、何とか本気を出して、チャンスを掴めるかどうか、「助けて下さい(お願いします)」の一言が言えるかどうか、それが肝腎と思われるわね・・・>と指摘して終える。



メモワール・その4 分析患者:さとみ 女性 24歳

或る分析セッションでのこと。先週の木曜日、おばあちゃんが亡くなったと報告。翌日、通夜に出席。(彼女の後見役の)横浜の伯父さんが折悪しく海外に出張中で、親戚大勢のなかで自分がまるでポツンと独りみたいで心もとなかった、と語る。これより3週間前に肺炎を起こして、一時危ないということで皆が病院を訪れたことがあって、横浜のおじさんも今回の出張を見合わせるつもりでいたのだが、おばあちゃんが又持ち直しそうだったため出掛けたとのこと。彼女が連絡先を知っていたので、国際電話して、彼に訃報を知らせたんだとか。誰も泣かない中で、一人涙を流して、皆の手前気恥ずかしかったが、それでもやはり悲しいという思いがあって、泣いていたと彼女語る。<これからも、多くの人々とのご縁に与かるであろうし、そう願いたいわけだが、やはり振り返れば、何といても両親共にいなかったさとみさんにとっておばあちゃんとの因縁は深いものがあり、おばあちゃんを失ったことが大きな痛手でないはずはないから、悲しくて当然だったろう・・・>と示唆。

翌々日、火葬場に行くのも本当はわざわざ行かなくてもよかったわけだが、行こうと思って行ったと語る。<それだけの義理というか恩義はおばあちゃんに対して充分あるわけで、生前に恩返しがどこ迄やれたかという負い目がなくもないとして、せめて最後まで、見送ることを自分に課したということは、むしろさとみさんにとって大事な意味があったわね・・・>と示唆。もっと以前なら、おばあちゃんが死ねば、自分も生きてはいないと迄思い詰めていたわけで、それが今現実に、こうして普通に生きていられる自分が不思議なぐらいだ・・・と述懐。<おばあちゃんが入院した頃から徐々に、さとみさんの中で「後に残される者」としての覚悟を心準備して来たということだろうが、そうした自立へ向けての‘時間稼ぎ’に必要なだけの時間をおばあちゃんが充分生きてくれたということは、振り返って本当に有り難かったと言えるわね。何しろ初回の「保護者面談」にお越しいただいて私がお目に掛かったのは、実に7年昔になりますものね・・・>と示唆。親類縁者の眼には、自分とおばあちゃんがかくついた具合にしか見えてなくて、そうすると自分もおばあちゃんの庇護の下に隠れて、自分を主張することが控え目になっていた。いつも「ここに」自分が居てはいけないような、居てすみませんといった感じだった・・・と振り返る。<そうなのね、「ここに自分は居てはいけない」からようやく解放されたことになるのね。又実際に、おばあちゃんが老いて不自由になり、親類縁者からの世話が要るようになって以来、悪いようにはされてはならないと、さとみさんがおばあちゃんを庇う気持ちも出て来て、まるで人質を取られているかのように、身動きが取れない思いもなくはなかったわね。それがこれからは、自分を自分としてだけ主張してゆけばいい、自己本位で生きてゆけばいい自分をやっここで取り戻すことが出来たとも言えるわね・・・>と示唆。

実際、火葬場などでも、いろいろと親戚の間でグループがあって、自分はどこにも入ってないだけに、それぞれの言い分がよく聞こえてきた・・と面白げに語る。ああだこうだと他人をあげつらうことで右往左往するわけでもなく、その都度その都度自分が居られる場所に居て、そこにいた周りの誰彼を相手にしてという具合で、極めて自然にその場での身の処し方を心得た態度であったとうかがわれる。<もう自分を「こども扱い」には出来ない。或いは「こども扱い」はされないという覚悟のようなものが出て来たかな・・。それって、自分は言わなくてもいい、しなくてもいいとか、聞いて貰わなくてもいいといったことはもはや済まされないということなのかな・・>と示唆。でも(親類縁者との関わりがどうかこうかではなくて)、今はどちらかという、学校の進級試験の真っ最中で、準備不足で臨むため、散々な結果で、追試を覚悟で受けてる、情けない自分がいて、皆が結構出来たようなこと言ったりするものだから・・と、やや気落ちした面持ちで語る。自分に失望したり、楽観したり、どこまで何が出来て・出来なくて、ああ私ってこんなんだわあ、と一つ一つ経験する中で、何やら‘自分の輪郭らしきもの’を掴み始めているとも言えそうね・・>と指摘。傷付く自分がいたり、悩む自分がいるが、今日は今日、明日は明日と割り切っている。そうでもしなくては、毎日やってゆけない。要らないことに気を奪われなくなった。でもその分、‘鈍感’になってゆく、と彼女述懐。<つまりは、自分をしっかり仕切る自分がいるってわけね。それは一応立派な「適応」と言えるでしょう・・>と示唆。

以前は、私って彼ら(一族郎党)の「付け足し」でしかなくて、だから気遣って、皆の顔色窺って生活していた、とあれこれ回顧する。自分は飽くまでもおばあちゃんの付属品でしかなくて、そこへ戻りたい自分もチョッピリあるが、いつの間か私一人として皆に見られている、と語る。親戚の或る人が、さとみちゃん元気になったねえ、大変だったねえと言ってきて、その折木場の伯母さんは傍らに保護者みたいな顔して自分に寄り添って、それに相槌打っていたんだとか・・。彼女を嫌って、一生顔見ないと思っていたのに、そう思うことは今出来ない。「ハアー、いやどうも・・」とかへエラへエラと受け答えしている自分がいた、と彼女語る。「誰かの～としての私」、つまり縁故とか絆とか、そうしたことを目指すことは大事であり、それを未来に見付けられると期待したいが、それ以前に今はともかくも「私一人でやれた!」、そんな自信が欲しいさとみさんがいるのね・・>と示唆。

学校での実習の際、試験管を握りながら、「触れてる」という実感があるんだそう。「ああ。(自分は)衛生技師の学校に入ったんだなあ・・って。<後悔しなくていい自分がここにいるということは、まずまずめでたしかな・・。そう言えば、「定時制」の頃、これで自分が世間で通用するとは思わなかったろうし、何がどう通用するかしないかなんて分からないわけで、でももし今ここで通用すれば、どこでも通用するといった居場所に収まったということなら、正解であったことになるわね・・>と示唆。こうなれば意地しかありません、と彼女返答する。<評価が欲しいさとみさんがいるわね。与えられたチャンスはモノにすること。奪われることもなからう・・>と示唆。

実験室の助手が、自分と変わらない年齢の彼女たちなのだが、見るからにツンケンしてい

るんだとか。でも実験の手際もいいし、あこがれちゃうんだそうな！<自分にとって利用価値ありと見做す以上、それにそれなりの評価を下す必要はあるかな・・>と示唆。暗記もの・計算ものが苦手。実験は、自信あるわけじゃないが、「これ、私何とかやれた・・」という手応えがあるのがいい、と語る。わけの解らないものがトコトンこまで行っても解らないという場合もあるだろうが、その内わけが解るということも、幾らかはあるかも知れない。そのためにも「知りたい」という意欲と、「解らない」に耐える辛抱が期待されていることになりそう・・。あれとこれとかどう関連性が見いだせるか、ジグソーパズルのようだけれど、いつか繋がりが見いだせたら、ああ何だ、そうか！ということになるのかしらね・・>と示唆。「繋がりが出来て、‘丸くなる・・’」、と彼女返答する。

ところで、先だつてのこと。長野でのスケート教室にも、成績の悪いのをカバーする意味でも何が何でも出席したんだそうな・・。他の人がリンクを2、3周してるのに、まだ自分は1周程度で、コーチに呆れられたりしたが・・。中には途中でダウンする人がいたけれど、自分は最後まで何とか留まった、と語る。<何事もやればやるほど、力が身に付くということが信じられるとすれば、おそらく耐えられないが耐えられるに転換してゆける、強い免疫力にもなるわね・・>と指摘する。

<将来この仕事に向いているのかどうかは分からないにしても、とにかく今この持場を離れる気持ちはなさそうなのね。結婚すればどうなるかという思いはあるとしても、とにかく自分の仕事を持ちたい気持ちには変わりなく、そうしたキャリア志向は、定時制高校時代、さとみさんの周りの誰も余り云々するという事はなかったわけで、「私将来～～になる」という類いのこと聞かれなかったわよね。さとみさんの場合は、やはり社会に世間に一人前として認められたいという気持ちがあったからなのか。わたし誰？わたし何？と問われた時に、答えられる何かが欲しかったということかしら・・>と示唆。その当時、定時制ということもあまり(他人に)訊かれても説明しなくて、今なら衛生技師の国家試験目指していますと言えば、まあそうなの大変ねという反応が返ってくると、自己存在を彼女アピールする。

ここで、キャリア志向と共に、自分のからだそして心の管理が大事と示唆。(分析開始当初、過食・嘔吐の症状があり、そのせいで止まっていた)「生理(月経)」について触れ、尋ねると、1年以上前から始まっていたと報告。大概定期的だが、ここしばらく生活の乱れもあってか、なかったり、時々変調があるが・・と語る。将来結婚したり子どもをつくったりはともかくとして、アルベキはずの‘月のもの’がアルというのがまともであるとしたら、まとも扱われたい・一人前に扱われたいさとみさんがいたわけだから、それは大事なことになるわね・・>と示唆。近頃は自分の住まいが自分の家になっていて、人と一緒にいたい時もあるが、一人になるとホッともしる・・と語る。「参宮橋」に下宿していた頃は、そんな風ではなかったと言うので、「自分の所有」に対して、臆病だったりあるいは怠惰だったりするさとみさんだったのね・・。でも今やっと、あれも私の、これも私の、と「所有」を積み重ねている様子で、たぶんこれからだろう・・>と指摘。ボーイフレンドについて尋ねると、まだ付き合っていると言う。一時期仕事の契約が切れて、実家のある地元青森へ帰っていたが、東京に

今居るんだそう。時々ケンカもするけど・・・とか。あちらは細かい、こちらは雑把だから(それでウマが合う)・・・と笑う。彼は結構マメに動く人らしい。自分のことは奥さん任せで何もしない男の人もいるが、同じようにあれこれ動いてくれる人の方が楽だ、と彼女。<いろんな付き合いの中で、お互い同士違って受け入れられるということ、同じじゃなくてもここに居てはならないということにはなっていないよだね・・・>と示唆。自分を特別視しなくなった。同じにならなくてもいいのだと思い始めてる。同じじゃなきゃという観念に縛られ、いろいろそうじゃないと否定する気持ちがあっても、そのままに曖昧にしてきた、と彼女自分を振り返る。<違って、ここに居ていい自分を維持してゆけるかしら・・・>と問うと、人間関係は大事だと思う、と彼女。 <そうだね。いろんなものが自分のもの、自分のものじゃない、これは今は要る、今当分は要らない、またいつか欲しいとか、様々な事柄が、さとみさんの判断に任せられているということになるかしら。それで、自分で自分の帳尻を合わせてゆけるということになろうかしら・・・>と示唆。自分が欲しくても相手に拒絶されることもあるけど、これがダメなら総てダメと思ひ込むようなところがかつてあったけど、今はこれがダメなら、別のを探すと思う、と彼女語る。随分タフになったのね?と訊くと、万が一進級出来なくても、次のことをその時は何か考えると思う、との返答。<この時期、そろそろここでの分析治療を終えることも彼女自身の選択として一つの「自然なこと」になりそうだね・・・>と示唆すると、ここを終わる時はもっと‘劇的’なことになるような気がしていたが、そうでもなくて、「なくても構わないかな。いつか又しても、今はなくてもやれるかなと思う」・・・と語る。おばあちゃん存在がずうっと重かったが、死なれてみて、それほど重すぎることもなかったという思いがした。高校卒業したということを伝えて、自分を認めて貰いたかったから、最期何言っても通じなかったから悔しくて!と率直な物言い。<おばあちゃんの意向をさとみさんが引き継いで、それを自分との約束として果たしたということになるわね。そのように自分との約束を果すことの中でおばあちゃんはさとみさんの中に生きていたことになるわけで・・・>と示唆。<ここでの分析に何かしら意味があったとしたら、それをこれからさとみさんが山上先生と一緒にではなくて、自分一人で引き継いでゆくこと、つまりまだまだこの「続き」はあると期待したい・・・>と指摘して終える。



メモワール・その5 分析患者:りかこ 女性 42歳

或る日の分析セッションでのこと。これ迄鬱々として人生送ってきて、自分を発散させてないと、彼女振り返る。どちらかという、抑圧されており、いつも自分でやってるという感覚ではなくて、やらされているという感覚でしかなくて・・・何か物を言えば誤解を招く恐れがあるから、言わないで表面上は衝突もなく繕ってきたのだが・・・と述懐する。<虐げられた少数民族というのがいる。自分たちの言語を奪われ、文化も根こそぎにされた彼らたち、だが今や地球上のあちこちで自分たちの言語をそして文化を取り戻そうとする動きが見られるが・・・。さて、そうした「植民地化された自分」を奪回できるかどうか、その闘いはりかこさんの場合、何を拠りどころにしてということになるのか

しらねえ・・・>と問う。「鬪い」というのがあるが、あと一つ先生がいつぞや言われた自分の人生と折り合いを付けるということ、こんなものだと思えること、それが二者択一ではなくて、どちらもが並行してあってもいいかなという気がしてきている・・・と彼女返答する。なるほど！と応じる。

最近それで思ったのは、男だから女だからということではなくて、次の者たちのために働きやすい環境を自分がつくっておいてやらねばということ。職場のかつての先輩たちは確かに仕事面においては見習うところは多々あったが、でもこちらが働きやすいようにといった配慮は乏しかったと批判的に回想する。<これ迄はともかく、りかこさんの場合、これからは年齢的にいっても、他人を自分に付き合わせてもいいということになってはいないか。だから、これお願いねとか頼みますとか・・・ね。確かに仕事が覚えられてないうちは、誰からかの何をどうでと指示待ちで、だから主体性が侵されるとも言え言えるが、だからと言って「私が私が！」では、それは我を張ることしかなくて、仕事もまともに覚えられなかったろうし、でもこれからはそろそろ自分が自分を仕切れるということになってゆきはしないか、それは職場でも私生活でもだけどもね。・・・確かに「拒否されることが怖い」ということはあるとして、田舎なら役割・役目が黙っていても決まっているということが多いけれど、都会ではお互い同士「用のある関係」になるためには、いかに用事をつくるか・拵えるかの工夫が肝心だろうし・・・>と示唆。

私生活は私一人だから、それはいいとして、職場では確かに違ってきている。(隣の席の同僚)マブチくんが変わった。(彼と)いい関係になってるとちよっぴり嬉しげな声で彼女語る。例の鼻をグジュグジュ言わせて、鼻かんでらっしゃいと私が言った頃から変わってきて、以前は取り付く島がないというか、どこからどう反応を引き出せばいいのかさっぱりだったが、最近あっちがベッタツとしてきて・・・と、彼女笑う。<ああ、それは分析でいう「母親転移」ということかも知れない。母親がおばあちゃんだったりもするかも知れないが、かつて母親やらおばあちゃんやらに向けていた依存感情がそのままりかこさんに向けられているといったこと。まあ時には、「いい加減にして！私はあなたのお母さんじゃないのよ！」って言いたい時もあるだろうが。でも時にはそれになってあげるのも一策で、それでりかこさんにとって‘扱いやすい彼’になるということにもなろうから・・・>と示唆。いい関係になって良かったと思ってる。どうせ2、3年我慢すればいなくなる人だと思って、済ませることも出来たけれども・・・と彼女。地方では「中央」の指示通りでいいわけだが、でも「本庁」ともなれば、一から十までともかくにもどうでなければならぬの規則絡みで一々判断を下すということが慣例だから、戸惑っただろうと思うんですよねと、ここでマブチくんに理解を示す。<彼自身何が解っていて、何が解らないのか、自分に何が出来て、何が出来ないのかが解らない内は、お隣のりかこさんに何を頼んでいいのかも解らないでいたろうし、それが今ようやく何を頼めばいいのかが解ってきて、だからやってもらったことにも感謝できる彼になってきたということ。つまり自己が把握され、初めて周りとの繋がりに自分を繋げることがようやく可能になってきたということであり、それにりかこさんが手助けしたとも言えそうだ・・・>と指摘。何もかも自分のせいだと思わなくなった。誰かが気分が思わしくなさそうだとしても、それはその人の事情でという風に捉えられるようになった・・・と彼女。<誰もが一人で生きてるわけじゃないし、誰とも関係ない！で生きられるわけもなくて、又生きていいとも言えな

いわけで、人がどう自分を思っているのか、自分が人をどう思っているのかをやはり気にしないわけにはゆかないお互いがいて、だから人とは実に‘いじらしいもの’だという感じがなくもない。でもそうであっても、うまく生きてるという自分というのがある一方で、‘いじらしい’が‘いじましい’になったりといった具合に、うまく生きられない自分というのがあり、でもどうせならばうまく生きられる自分を選びたいものだわね・・>と指摘。

ここに通い始めてほぼ1年近くだが、胸の奥の冷え冷えとした鉛のような塊りを意識しなくなってる。小学校ぐらいからわけのわからぬものにスッポリくまられたような感じで、まるで自分が表現されずに来た。勇気づけられたお陰か、と彼女語る。<勇気づけられるとは、ここ止まりではなく、まだ続きがあるという思いかな。或いは自分で考えることが許されてるという思いかしらね・・>と示唆。言葉を飲み込まないで、出すようになっては来てる。厭味を言わなくていいようになりたいと、ちよびり反省を込めて、彼女返答する。<どうやら世の中には「貧乏くじ」を引く人というのがいるが、ああだこうだご苦労な自分を愚痴ってたとしても、大変な思いをすればするだけ、私はこれだけやってるんだ！と威張ってられるってこともあるかしらね。実家のお母さんみたいにね。農家の嫁としてシャカリキになって一家を切盛してきた。男手が必要な分、父親に総てお膳立てしてあげて、父親は言われるがままで、殆ど母親におんぶに抱っこ。それで、「この家は、だから私でもっている！」と満足げでいられるのも悪くはないかしら・・。それというのはどうやら、外に自分にあれこれ命令する「主人」というのがあって、その彼(彼女)の用途の延長上に自分がいるという発想がそもそもありそうだわね。でも、自分の内側に「主人」がいてもいいのではないか。自分が自分にとっての「主人公」になるというのは、そういうこと。幼児期から親に向かって、どうして？といった問い掛けをしてこなかったりかこさんがいるわね。どうして？と訊かないとしたら、それはどうでこうでと答えがあるわけではない。子どもがある時期になると、よくどうして？どうして？を連発するが、それが本当にどの程度答えを求めているかというのは怪しいが、むしろそこに外界が「わけの分からない」ものではなくて「わけの分かる」世界としてあるという安心が欲しいということじゃないか。そうして世間と馴染みあうってことにはならないかしら。それに、りかこさんには、迷惑を掛けられない、だから「ないものねだり」などは致しませんというのがないかな？一切こちらから注文はしないということは、可能性を閉じている。相手から「有り難み」を引き出すこともない。つまり交わりが封じられているわけで・・。親子の間としても報いるとか報われるが閉じられていないかしら・・>と示唆。

私って昔から、本当に泣かない、おとなしいこどもで、時には余りにもおとなしく眠っているの
で、そこに居るって気付かれずに布団の上から踏まれたりしたりしたんだとか。他人との間にいつも隙間風を感じていた。個人的な関係性が成立し難い。根が生えてゆかないと、彼女語る。でも、本来的に自分が陰気とか悲観的なのではないはずで、これを言うのは厭なのだけど、昔母親が「おっちょこちよいの自分」を見て、チラッと気にくわな顔をしたということに関係しているかと思う。最近では悲観を跳ね返す、立ち直りが早くなったが・・。自分が思ったことを母親(世間体)に置き換えてみることでしか動

けないという二重構造が癖としてあった、と彼女回顧する。＜そうなのね。疑心暗鬼になることでいっそう「大丈夫じゃない私」に追い討ちを掛ける結果を招くということがありはしないか。そこでもう一つ積極的に‘人から支持されたい私’というものが希求されてゆかないという傾きが生じるのね・・＞と指摘。

さらに、＜そもそも父親にしても母親にしても、「生きたいように生きてる私」というのがなくて、むしろ自分を殺し、ごまかしごまかし生きてて、だから彼らには「素の顔・生の声」が見えない・聞こえないといった嘆きがりかこさんの中になかったかしらね。親元を離れた時点で、その「仮面劇」をおしまいにするチャンスはあったろうに、今でもそれを引きずっていないかしら。親から文句ばかりで誉められたことがないという嘆きはあるが、それはいい子でありたいという自分がいたからこそであろう。そこでは、さて、どう導かれたかったのか、が閉ざされている。つまり何のため・誰のために、自分は敢えて「いい子」でなければならぬのかの目的意識（ゴール）が彼女自身の中に見当たらないようだ。・・まずは、自分と遊んでみるのがいいわね。自分が何を言いたいのか聞いてあげることもその一つだけど・・。更には人と遊ぶこと、だから職場の皆さんに誘われてゴルフにご一緒するのもその延長上にあると思われる。・・でも遊びというのは、すなわち時間を無駄に潰すということで、親からは許されていなかったかしら・・＞と示唆。ちょっと暇で遊んでいたら、すぐに母親があれしてこれしてと指図して来て、ホッとしていられなかった・・という言い訳を彼女する。＜だから親の眼を盗んで、一人気儘に過ごしている自分を「シメシメ！私は得している！」なんて喜べないことになってしまったかな・・＞と示唆。そう言えば、過去に自分が何でどんな遊びをしていたのか、まるで覚えがない。かつて遊具やら玩具やらがあったようにも思えない。漫画雑誌は確か買ってもらった覚えがあるのだが・・と彼女戸惑いがちに返答する。これからは、親が（自分に）何してくれた・何してくれなかったではなくて、私が私に何してあげられる・あげてないといった観点が必要になりそう・・。一人では生きられないお互いがいるのを承知した上で、理解・了解を取り付けること。そのためにも、自分の中に人を、人の中に自分を見ることでしかない。つまり「一抜けた！の私」（ここに居て、ここに居ない私）ではなくて、「私ここにいます！」の私として相手に与えることだわね・・＞と指摘して終える。



メモワール・その6 分析患者：かつみ 男性 29歳

或る日のセッションでのこと。両親の気持ちばかりに眼が向いたままで、ずうっと自分がなかった、と彼語る。父親やら母親には彼らの思い描く筋書きがあり、それら与えられたままの筋書通りにいつか自分になってしまっていたと・・。＜丸ごと自分が親のモノになっている。死んだふりをしながら、そして即ちそれは‘生きているふり’でもありそうだが・・。でもそれは自分のではない！それは自分ではない！つまり納得していないかつみさんがいて、だから家出にも似た逃避行を図ったわけだが、いまだに自分のシナリオ（台本）を生きられずにいるのかしら・・＞と示唆。＜それだけ親から愛されたかったということなのだろうか。逃げたということは舞台から降りた、役の付かない俳優みたいに、役立たずな自分になってるというわけかな？妹みたいに親のシナリオの中に居座っていたい自分がまだいるということかしら・・。そう言えば、かつて今の自分は‘擬態’にすぎないと語っていたが、でも謀反の感情が根絶やしになっているとも思えない。だから家を離れざるを得なかったわけで・・。近く

にいれば罵り合う親子でも、遠くにいれば懐かしむこともでき、いい親・いい子になれるわけで、幻想を持てるわよね・・・>と示唆。母親が昔幼いころの自分をおとなしくっていい子だったと言ってた・・・と、彼答える。

ここで、父親がよく‘つまみ出す’との言葉を威しに使ったのを思い出す。その父親の声に愛着があるのか、それで今でもつまみ出される自分が想像される、と彼語る。職場でも、そして本（ベケット&ル・クレジオ）を読んでいる最中にも、その言葉が脳裏を過ぎると・・・。「つまはじき」という疎外感かしら？現実には‘不在の父親’が今尚も執拗に自分の中に居座っているという意味で、自分で一人二役をやってることにはならないかしらね・・・>と示唆。そうした一体感から離れて、広がりというか別の感覚が出てきたように思う・・・と彼。彼の愛読書のベケット及びル・クレジオとの関連で、主体の追及、知性への殉教が言及された。＜自分一人でケリを付けようとする態度が濃厚、そこには救済がないといった印象がある。それも下手すれば一種の傲慢さに陥りかねない。むしろ自分を幸せにできたのか、誰かを幸せにできたのかが問われるのではないか・・・>と示唆。

「自分のシナリオ」として考えられるとしたら、つい「つまはじきにされてる自分」を想像してしまう。職場でも、現実にはそれはそうなんだけども・・・と彼。それは究極には死になるがと・・・付け足す。＜そうしてまたまた父親そして母親の出番をつくってやるかつみさんがいるわね。こんなにも息子を愛していたといったセリフになったりするわけで・・・>と示唆。死ぬときには親には会いたくない、妹には会いたい気持ちはあるが・・・と彼。＜でも、実際にはあなたにもしものことがあれば、真っ先に親元に知らせがゆくわけで、彼らがすっ飛んでくるのは十分想像できるではないか。死んでもなお‘親孝行息子’をやろうとしている。それも彼らのシナリオの中でのかつみさんでしかないわけで。俳優で言えば、嵌まり役・当たり役ということか、歌手で言えば、この1曲で生涯名を残すといった具合にね・・・。親にしても自分たちは親で子どもを愛してるって、愛情を信じたいのよね。それは親もそうだけど、子どももそう。だから遠くに離れていて、その幻想を壊さないようにしている。それって親孝行でもあるしね。でもね、親にそう思わせておくのはいいとして、でもかつみさんにとって、本当にこれだけなのかが問われる。真実ではないものを信じているつもりの自分が「生きている」とは言えない自分になってはいないかどうか・・・>と示唆。さらに、＜「自分は自分でありたい。でもそれは果たして許されるのか」との自問自答があり、そのための時間稼ぎが今のかつみさんかも知れない。そうした許しは親(外側)の方からくるものではなく、むしろ自分の内側からくるものと考えたい。それは、親が生きていようと死んでいなかろうと、どちらとも関係なしに・・・>と指摘。今の自分にとって親は一部死んでいる、と彼答える。＜しかしながら、「子どもの私」を「おとなの自分」が内側に抱え、育はぐむことが大事。そういう意味として「両親へのこだわり」というのはむしろ徹底してこだわってみてもよからうと思うのだが・・・>と示唆。過去を忘れたままに生きることは、操り人形の芝居じみている、と彼語る。確かに！

＜そして、とことん考えれば、父親のシナリオ或は母親のシナリオだって、いずれにしてもその

中で彼らは「役」でしかない。それらはまるでどこかから借りてきたいろんな台本の寄せ集め、ツギハギでしかない印象がする。彼らにとってもそれが本意なのか不本意なのか、それはもう自分でも分からなくなっているのではなからうか。おそらく問うても、答えはないだろう。脳天気というかおめでたいと言うか・・・>と示唆。親たちには「考える」がなかったと彼。もし彼らが考える人たちだったら、自分もおそらく考えることが出来たろうに、それがなかったで、自分もろくに考えることが出来ずにきてしまった。今では自分は音楽も好きで、絵画も見るのは好きだし、いろいろと本を読んだりしているが、何も作れはしないと、落胆の色を深めながら悔いを語る。<受け身である自分にとことん引け目を覚める。それも際限がなくなるのも確か。でも、実際のところ、いろんな出会いの中であなたは呼びかけられている。まずはそれを喜ぶことが肝腎だと思いたい。生かされていることの感謝、もらっていいもらえて嬉しい、そこから「自分のシナリオ」は創造されてゆくかしらね・・・>と指摘。

これからの課題は「内面を持つ」ことだが。もしもそれをここで本気でするとなれば白紙に戻ってやらねばならないだろうが・・・と彼ためらいがちに語る。<「内面」は外来語だわね。日本語でそれを真に実感できること、掴み取ることができたらいい。それはおそらく精神分析が21世紀に課題とするものであろうか・・・>と示唆。オットー・カーンパークの『外界と内面』という著書を読んだとか。今ひとつ彼が「内面」を自らの中にそして患者の中にどう見ているのかが不確かだったと批判的。<触れられていなかったかな？どこまで行っても、語り得ないものがあろうから、治療者が患者から語られたものだけに一応の脈絡を付けようとする、無理が生じることもあるわね・・・>と示唆。

ここで、かつて大阪支所で出会った(彼が仄かに恋心を抱いていた)事務職の彼女について訊いてみる。不況で閉鎖され、どこへ行ったか消息不明だとか。彼女のことはいい思い出として残るだろうと彼(断念と悲哀の入り混じる声・・・)。<幸せだった自分。そして彼女の方もそうだったかな。誰かを幸せにできる自分を信じられたらいい。そんな欲を持っていいのね。いつぞや「自分を実感できたらいい」と語ったかつみさんがいたが、これから「他者を実感できたらいい」というのが次のことになるかしら。それを通して、自分の「内面」を持つということになるのかも知れない・・・>と示唆。それができたら音楽も本も要らなくなるかも知れない、と彼返答する。<さてどうだろうか？多くの人の眼に映る自分を借りながらも、自分の‘値打ち’を見定めてゆく自分自身の眼を持つこと、そして「自分は自分、これでいい」を探してゆくことなのかしら。最後には、自分はこうなるべくしてなった、そしてこうでありたかった自分を見付け出す、そんな意地が、またおそらくは自分をいとおしく思う自分が問われてゆくのだろう・・・>と指摘して終える。



メモワール・その7 分析患者;じゅん 男性 28歳

或る日のセッションでのこと。付き合っているサキコさんを話題にし、彼女に対して思い入れが日々強まっている、と彼語る。お互いに話題の興味なり嗜好もほぼ似ているし、ひとつ皿を取って二人で食べるとか、気取らずとも済む間柄になってきたんだとか。その一方で、先日彼女からつ

い最近まで付き合っていた彼が彼女に未練があるらしく、電話してくるなり、退社時刻に玄関口で待ち伏せしていたりとかで相談を持ち掛けられた際、強く彼を振り切らせて自分の方に彼女を振り向かせる言葉を告げられなかったことを悔やむ。愛してると言えば恰好よくて男らしいことになるのは分かっている、恋愛感情ではまだないという冷めた気持ちもあって躊躇したとか。先日実家にお花見に彼女も連れて行く、家族にも会わせたいし、友人にも会いたい時には彼女をも一緒にという具合に、無理なく関わりの輪の中に彼女が加わって来ている。好きになりつつあるのは事実だから、終わるのは残念だと相手に告げたのがギリギリ一杯の誠意の限界だったとか。＜三角関係はもう懲り懲りと、かつての悪夢の繰り返しを避ける警戒心もあるようだね。憐憫の情といった観点から見て、自分が失う側に立つのは無論不快であるとして、たとえ勝者側に立っても、もう一人の失う側の男がいれば、やはりじゅんさんとしては辛いかしら？＞と訊く。＜いずれにしても、頼まれても応えられるものとそうではないものが厳然としてあり、あなたが応えられないものについては、彼女が当然自分で決断しなくてはならない。それがじゅんさん側の誠意と映るかどうかは、彼女の感受性に任せるしかないわね。どうやら今はお互いがお互いにとって‘稽古台’になっている向きがありそう。結婚とか恋人とか、勝手な思い込み(思惑)に相手を嵌めようとして、そして逃がすまいとジダバタする彼女と、嵌められて堪まるかと、彼女から離れられなくなるのでないかとジダバタする彼と…。恋人がいなきゃ、結婚しなきゃ、恰好付かないという思い込みが優先されて、とにかくにも恋人のレッテルをお互いに貼ってしまおうとする性急さに無理がありそう…。恋人が要る・要らないということと、互いに目の前にいる相手、サキコさん(又はじゅんさん)を欲しい・失いたくないと思うかどうか、そしてお互いの関係に希望が持てるか否かは別でしょうね…。＞と示唆する。

ここで、じゅんさんには妹がいるわけで、それも彼女とほぼ同年代だし、彼女に対して兄貴として振る舞うことが本来彼の嵌り役でもあるはずだが、どうも実際のところそうした印象ではなさそう。女性一般について、それがどのぐらいしたたかで、どのぐらい脆い^{もろ}ものか、どうも掴みどころがないといった戸惑いが彼にあるようだと指摘し、妹について尋ねる。彼女は、20になるかならないかで結婚。今は2児の母親。自信家で小学校ではクラスで一番威張っていた。一緒に遊んだことはあまり無く、殊更対立していたわけでもなく、でもあんなになれたらいいなと内心羨ましく思っていた、と彼語る。＜確かに、男3人の兄弟の中で女一人って、大事にされて当然、可愛いがられて当然かも知れないね…。＞と示唆。そんな妹とも違って自分の場合は今でも人に誉められると、どうせお世辞でしょって内心思ってしまうんだそう…。＜どうもそこら辺が、サキコさんとダブるところだね。彼女はどうも自信家とは言えなさそうだし。「振り向かれる」ことに、不安が付きまとうみたいよね…。＞と示唆。確かに、そうして僕が誰彼を振ったみたいに、今彼女は自分を振ろうとしているのが分かる気がする…。と語る。その不全感を、彼女に繰り返させない為に、何が出来るか。＜‘(自分に)自信がある’について果たして正当な根拠が要るかどうか難しいところだが、実際のところ、彼がいてくれてお蔭で私に自信が持てたとか、彼女がいてくれてお蔭で僕も自信が持てたということが

あってもいいかも知れない。それは、男と女との間だけではなく、人と人との間にも…。そうした認識から出発して、サキコさんとの関係に新たな展開を期待出来はしないかしら…>と示唆する。

馴染みのないものは、どうかするとすぐに排斥する傾向が自分にはあると、彼語る。目下グループ展の企画に向けて、20枚ほどの原画を制作中ということもあるせいか、自分の殻に閉じこもりがち。それもサキコさんへの牽制でもありそうだとか。彼女の期待に添えないとか、もう歯が立たないと唯もう自分の不甲斐無さに悩んでいるといったわけでもない。でもそこからの逃げなのか、以前気儘に描きたくて描いていた頃の自分の絵に戻りたがる自分がある。あの当時の、自分の作品など誰にも見て貰えない、といった焦りはもはやないのだが…。今は興味を持って見てくれる人がいるし、サキコさんだってその一人ではあるわけだし…。でも、もっともっと挑戦していいはずと内心想うし、最近では仕事を通して、自分が自分について「生きている！」と感ぜられてる、と述懐する。<(自分の作品を)見て貰いたい、認めて貰いたいからさらに一步踏み込んで、自分を動かす、人を動かす、物事を動かすといった手応えをようやくものにしてきたようだね。かつては人に動かされるだけでしかないといった恨みがあった。‘影響される’というのはじゅんさんにとって‘人に身を委ねること’であり、それにはまるで自分が汚されるやら潰されるといった警戒心が伴った。課題になるのは個性の保持やら本来の純粋な自分らしさの追及ということになるかしら…>と示唆。最近そうした自分の個性を主張してもいい状況が増しているのも事実であり、もはや単にイラストの依頼ではなく、アート・ディレクターとして、総合的な仕事を頼まれたりもしているのだし。もっとあれこれ思い切って主張していいのにと思うことがあるんだが…と語る。<でも何かしら、自分の口から出た言葉が、人から人へと伝えられて行く内に、まるで自分のものではないものになる恐れがあって、つい自分を引っ込めてしまうかな…。いろいろな人から話を持ち掛けられて、一つ一つの約束事が増えると、次第にうるさくなる。放って置いて欲しい気持ちになるのよね。それってというのは、自分のなかで「自由」がいいのか、「不自由」がいいのか、どうにも折り合いが付かなくなるといった悩みとしてここで改めて考えられたらいい。どうも「仲良くケンカする」ということが思い付かないような…。それに、感情剥き出し(裸)になることの見苦しさには耐えられないのよね。相手に黙っていてもえれば、自分の方だっておとなしく黙っていられるといった、それこそ‘虫の良さ’が目立つ。そうした背景として、彼の中にある父親と母親との加害者・被害者関係がうかがわれる。それも立場が簡単に逆転しそうな可能性も潜んでいるわけで(例えば、母親の病気を契機に)…。それでも、尚もそうした関わり合いに「要りません！結構です！」を言わないとすれば、人は究極にそこから何を心得るのかしら？少なくとも、現在ここでこうしてじゅんさん自身についてそして彼女について語られるなかで、相互に自分が自分なりに彼女が彼女なりに一層明らかになり、そしてあらわになるとしたら(そこに自分が掴めたと思うものがあれば)、それも何かしら捨て難い…>と示唆。

ここで彼が夢を語る。《夢：即席の俳優を頼まれる。いざ本番で舞台を待っている間、自分が全然セリフを覚えていないことにハタと気づき、慌てる。周りを見渡すと、皆プロの顔をしている。

そこに一人女の子がいて、自分と同様、セリフを覚えてないと不安な面持ち。自分が慰めている。何とかなるから・・・！と彼女に言ったんだそうな！ <「逃げたい、降りたい自分」と、それと闘い、「踏み止まろうとする」自分と・・・大丈夫と言いつ聞かせて、不安な自分を宥めることが以前より上手になったかな？傍らにいる‘もう一人の自分’と一緒にというのがいかにも心強い！・・・関わり合いの中で、自分の身に起きたこと、彼女の身に起きたことを、なかったこととして拭いさることは出来ない相談。見たものは見なかったのではなく見たのであって、聞いたことは聞かなかったのではなく聞いたのであること。生身の怖さ。そこでの変化を、じゅんさんはじゅんさんなりに、彼女は彼女なりに責任を引き受けることでしかないわけで、それが怖いと尻込みすれば、貧しくそこ止まりで終わることになるかしら。制約やら制限の中で、尚も「いい関係」を持てることで、貧しくなるのではなく豊かになれることを考えてゆきたい・・・>と指摘して終える。



メモワール・その8 分析患者:まひと 男性 21歳

或る分析セッションでのこと。大學の期末試験が一応終了し、1カ月の休みになるんだけど、何かと不安で落ち着かない。特に計画していることもなくて、自分を持て余してる、と彼語る。<わざわざ‘付き合いにくい’自分になってはいないかしら。誰かからの呼びかけを待ってる？待ちの姿勢というわけかな・・・>と訊く。誘われた方が気が楽・・・、と彼返答。<本当かしら？「自分の意志が最優先」というのが本来まひとさんのポリシーだったはず。だとしたら、「自分は不本意だった」の言い訳を後でしそう・・・>と示唆。本意のつもりでも、いつか「やらせ」になってしまう、と彼嘆く。渴望感が萎えてゆく。かげろうのようなもので、欲しいと思っても、それに近付くと萎えてしまっている自分がある、と落胆を吐露する。<それって、良いものが全然大したことの無いもの、つまらないものになるということかな。渴望を取り上げられてしまうとしたら、取り上げるのも自分だし、取り上げられるのも自分だと考えてみたい・・・>と示唆。

前回のセッションの後で、自分がいつ解放された気分でしたのかを考えていたら、まるで記憶がなくて、小学校2年ぐらいまで遡ったとか。無難に周りに順応してただけで・・・。当時自分はずでに消耗していたし、誰かに何かに抗うことで消耗したくなかった、と語る。<他人を裏切ると自分を裏切るとはどっちがよりエネルギーが消耗されるか。納得していないことをやらせられるということはどうも消耗に繋がりはしないかしら。他人に逆らい裏切ったとしても、自分に納得できることを自らするとした方がむしろすっきりはするのではないか・・・>と示唆。自分の方からは何も選ばなかった話を彼がする。高校時代にアメリカ留学して、帰国後に一学年下のと一緒にあって、一目置くようなやつには近寄らず、休み時間も自分の机から動こうとしなかった。他のやつらが周りをウロウロしていた程度で・・・。旅行に行った折りに、喧嘩というか、自分一人で爆発したりだったりして、そんなこともあるはあったけれども・・・と、あれこれ回想する。<仲がいいから喧嘩するというのもあるう>と示唆。でもどいつも長続きはしなくて、いつか疎遠になった、と彼は物憂げ・・・。<友達って

何だろうね。それは憧れだったり、それに脅かしもちょっぴりあるかな・・・>と示唆。(彼らは)無難な連中ばかりで、全然脅かしはなかった、と辛辣な口調。<憧れもなかったわけなのね。それを今ようやく求めたい気持ちになってる。手遅れでないといいね・・・>と示唆。それを試そうとしている、と彼返答する。

<かつて友達との交遊でまひとさんに結構選り好みはあったはず。どういのは避けて(例えば、マリファナやってるとか)、或はどういのは付き合いたいといったことがね・・・>と示唆。さらに、オリンピックを話題にして、スポーツ選手とコーチの関係に言及する。どれほどコーチが適確に選手を把握しているか。しかも華々しい舞台に顔を出さず、いつも黒子役。映画『炎のランナー』に触れて、<ハロルド側からコーチを依頼された折り、ムサビーニは「プロポーズするのは自分の方からだ・・・」と彼に釘を刺したわね。プロコーチとしての誇りを彼は言ってる。つまり見込むだけの力量を見いだせない者には自分はコーチをしないという意味。まひとさんにとってそうした自分を預けたいと思える「コーチ」に巡り会えたということがこれまでであったろうか、そしていつどこで誰に自分が見込まれたということがあったかしら・・・>と問う。予備校などはそうかも知れないが、でもパーソナルな関係ではないわけで、自分が見込んだとか見込まれたといった経験はどうも思い出せない、と彼神妙に語る。<「見込む・見込まれる」がどうも言葉としてピンとこない様子だね。それは「支配する・支配される」といった脅かしに聞こえるのかな・・・>と示唆。『炎のランナー』のコーチの中にも計算づくのものを感じた、と彼。<そう勿論！でも最後に、ハロルドが100mレースで優勝したとき、「おまえは俺の息子だ！」と言って、泣きながら彼の肩を抱いた。そこに打算のみならず愛情は感じられなかったかしら・・・>と示唆。でも、スポーツ選手の場合、契約だから自分に対してその人が責任を取れるだけの根拠はない、と彼主張する。がむしゃらに「おまえはできる」と言われても(それは困る)・・・ということらしい。<そう確かにおまえに自分の何が分かっているのかというのはあろうが、自分が自分を分かっているつもりでいても、さて責任持てるだけの根拠があると言い切れるだろうか。でも自分よりも先に歩む人、その人の経験から自分が何か学べるものをもっている誰かから自分が導かれることを、支配されるだの拘束されるだのと恐れてはいないかしら・・・>と示唆。これから先、彼が所属する大学の研究室は、教授ら、助手などの他に、大学院生とか留学生、外部から招聘された研究者も、それに事務職の人也大勢いて、結構大所帯とうかがっていたが・・・と水を向けると、これから自分の上に先輩とか誰かがいるというのは随分久し振りだ、と彼答える。(何故か嬉しそう！?)

<ここで何故こうしたことが問題にされるのかは、能力が発揮できなかったという彼の話しとの関連で、これから研究室に入ってからのこと、まずは自分の外に自分を鍛え導いてくれるコーチを必要してゆくこと、それと自分の‘内面’においてもまたそうしたコーチが必要とされることが問われてゆくから・・・>と示唆。自分が自分の中の力を顕在化してゆくこと、それはナイと思われるものをアルへと転換してゆくことだとしたら、自分の中にナイと思いつくところで終わりかねない自分がいるとして、もしそのとき誰かがそれはアルとして何らかの方向をまひとさんに指し示してくれるとしたらどうだろ

うか。自力に頼るのみではくたびれて、貧しく終わってしまいかねない。そんな気掛かりがある。自分という現実についてもどこまで分かっているか、誰彼のそれぞれの現実についてもそうではないか。皆が均質化あるいは画一化してゆく。そしてまひとさんの言うところの無難なところに収まってしまう。でもそれだけが「私」というのでもない。時には自分に自分が「裏切られる」ということがあってもいいし、「意外な自分」というのも逆に面白いかもしれない・・・>と示唆。

あまり自分が変わってゆくことは考えられない。父親がそうだから。ずうっと彼に変わって欲しい変わって欲しいと思っていたが、依然として変わらない。おそらくこのままで六十歳の停年を迎えるんだろう。自分もそうなるのを恐れている、と彼。<そうねえ、自分が変わってゆくということ、それは自分でないものが自分のものになってゆく。いろんな自分でないものがぎりぎり抜き差しならないところでせめぎ合って、それで自分のものになってゆくわけで、そのためにも極力自分を開いていたいよね。いつもね。閉じないでね・・・。でも変化しなくてはならないというのを外側から強制されることはできない。それは「内側」の促しによるものだろうから。それに変化したい・しなくてはと頑張ろうとして、そうできるのとも違うわね。でも自分の中に自分じゃない自分がある。日々というか一瞬ごとにこれは自分、これは自分じゃないと決めている自分がある。ゴーサインのアル・ナシで自分になったりならなかったりね。潜在する可能性を顕在化する・顕在化しないとも言い換えることができるかな。それで自分ではない自分っていうのはどこにあるかという、それは「他者」ということになるかな。そんな風にそれを人の中に見たり、また自分の中にそれを見たり・・・。そこに不思議さそして驚き、さらには魅力が見付けられたらいい・・・>と示唆。彼頷く。<遊びましょ、遊ぼう、遊ばないかって、お友達同士の呼びかけ・働きかけて、いつ頃までしてたかな・・・>と問う。そう、昔よくしてました、と回顧する。<忘れてたわね・・・>と示唆。自分が選択してなくてもせざるを得なくて、それでしていたことが多くて、それだと余裕がなくなり、選択したいことに十分エネルギーが割けなかった、と彼語る。<そして、それが今ようやくそろそろ違ってこようとしているわけなのね・・・>と指摘して終える。



メモワール・その9 分析患者:かずき 男性 32歳

或る日のセッションでのこと。(6分ほど遅刻。)遅れてすみませんと、彼謝る。<自分はここで待たれているという自覚が出てきたのかな?それがなければ「遅れてすみません」もおそらく無いだろうから・・・>と示唆。否、どうしたのですか?と先生に訊かれるのを牽制したのだと彼素っ気無く答える。<でも学校の先生みたいに、「どうして遅刻をしたのか理由を言いなさい」などと山上先生は言わないよね。でも、「どうしましたか」と訊かれたかったのかな?> 待たれているというのがどうも苦手だと彼。<講演などならば、時間になれば始めましょうで、山上先生は話し始めて、後から遅れてきたあなたはこそこそと空いてる席に就くということになるかしらね。でもここではこのセッションはあなたが来なければ始まりはしないということ。見切り発車で山上先生一人で始めるということはないわね・・・。「イナイナイバー」とか隠れんぼならば、やはり「バアー!」とか「見付けた!」とか

くてはね。以前のように待たれているのかいないのかあまり意識していないのではない。やはり自分は待たれているということを意識し始めている。。それに、どうもセッションの終わった時点ではああも言えば良かったこうも言えば良かったというのがありそうだし、一週間待たせられてる間に、この次ぎはこんなこと言おうと考えていても、いざとなるともういやということになったり。。子どもがあのおねあのおねと親に付きまとう。ちょっと待ってね待ってねと言われるといつの間にかもうどうでもよくなるのにも似てね。。>と示唆。取り敢えずからだだけはやって来ましたからということで安心する、と彼笑う。そうね、(自分に)形があるって大事なのよね。自分が心もとなくなって鏡を見て自分のからだを確認して安心したり。。そうね、コンニチワ・サヨナラの一瞬でもね。ここでもピンポンとチャイム押したら誰も出てこないというのじゃなくて、ちゃんと山上先生は出てきてくれる。形があつたって確信できる。安心するのよね。。>と示唆。

ここから、登山に行ってきた話を彼がする。1～2千メートル級の山とか。三日間の休みをもらった。職場の人間は自分が山に行くことを知っていて、家でゴロゴロしていてもいいのだが、皆に行くと言った手前行かざるを得ない気分になって行った。行ってしまえば気持ちいいのだし、それはいつものことだが。。と彼。群馬と新潟の境目の山。いつも一人で行く。山道で途中誰とも会いたくないので、出来るだけ週日に行く。頂上に誰もいないとほっとする。<そうね、すべて視界に入る景色が自分のものということね。贅沢な感覚。甘やかされているみたいなの？>と示唆。エッ、ああ一体感ということですね、と彼。<じゃあいつまでもそうした甘やかされた感覚でずうっと永久的にそこにいたいと思うかしら？山に独りで入って死ぬというの、よく聞けど。。>と訊くと、そうでもなくて家に帰りたくなる、と彼笑う。暖かいし自分のものがあるから。。と常識的な返事をする。いつも山小屋にはできるだけ泊まらない。体調のいいときは寝袋とテントを持ってゆく。(地図に道案内されて)無人小屋を訪ねて行ったりで、水は途中で汲んでゆくし。。誰もいないとほっとする。で、今回はどうでしたの？と訊くと、ちょっとどうかなと思ったけれども山小屋に泊まった、と彼。寒かったからなの？と聞くと、まあいつも寒いのは寒いんですがね、と彼軽くいなす。<何かしら‘無駄な抵抗’をしなかったみたいだね。スツと足がそっちと向いたということ、人の温もりとかにね。生きてゆこうとする意志がそこにのぞかれる。。>と示唆すると、彼黙る。そして、死ぬのが怖くなったとポツリ語る。それって今や「宗旨変え」ということになりますか？と訊くと、「唯の人」になったような気まずさがある、とちょっと慚然とした物言い。それで、まるで私利私欲に自分が懲り固まってゆくみたいで。。と戸惑いをあらわにする。それも筋が通らないけど。。と彼嘆息。

それから、山を歩きながら考えごととしていたと語り始める。実家は田舎風の造りで、風呂があつて、ガラス戸越しに中の様子が見えた。両親が二人で風呂によく入っていた。電灯を消してあることがあつた。<エヘーッ、何してるんだろと思ったかな。まあお仲のよろしいことってことかな？>自分もよく母親と一緒に風呂に入って髪を洗ってもらった、と彼。父親とも入ったこともあつたが。顔に湯が掛からないようにしてくれたとか、あれこれ述懐する。<子どもは、髪を洗われるの嫌がって

大騒ぎするのよね。でもそれも今思えば、甘やかされていたということになるかな・・・？>と示唆。母親がまだおっぱい出るのよと乳房を見せてくれたことがあって(幼稚園の頃)、白いものが出たから、珍しいものを見たようで、よく覚えている。それから本を読んでもらった。兄もイソップ物語は読んでもらったみたいだが、自分のときはグリム童話も読んでもらったように思う。<子育ても3人目だから、お母さんに余裕を感じるわね・・・>と示唆。でも本を読んでもらったときの母親の声が全然覚えな。<そうね、本読むときって、悲しかったり驚いたり可笑しかったりいろいろあったはずだけどね・・・。>以前父親の事故死したときその事故現場を見て帰ってきた母親がワンワン泣いていたのを不思議に思ったことを話したが、或る晩隣の部屋から母親の泣き声が聞こえてきて、襖を開けてみたら、父親が泥酔してケンカしたのか怪我をしていたらしく、お尻が裸で、母親が傷の手当をしていたみたいだったのを思い出した。<ムツとして無反応な母親ばかりではなくて、喜怒哀楽の感情を表に出す母親がいたんだということなのね。自然(山という懐)に抱かれたせいなのかしら。かずきさんの中でお父さんそしてお母さんの温もりやら肌合いが感じ取れる、そんな感触が蘇ったようね。あなた自身が自然体というか素直というか、‘無駄な抵抗’しなくなったからかな？そうなのにそうじゃないとか、そうじゃないのにそうだって、そんなふうに敢えて自分を思い込ませたり、だから不本意に何ごとかをさせられていると思ってみたり・・・。それって生きてるふりをしていたということになるかしら。或いは死んでるふりでもあるかな？いずれにしても、～～したいからするとか～～したいからしたという風になるといいかしらね。ここで、己の中で何が‘正しい欲求’かということが問われているようだ・・・>と示唆する。すると(それこそが分からないと言いたげに・・・)、でも実際には、例えば高すぎてどうしてもそれは自分には買えないとか、ダメなことってありますよね、と彼反撥する。<さあてね。欲求を充たすということをどのスパンで考えるかよね。今日明日ではダメでも1カ月先半年先1年先5年先とか長いスパンで考えてゆけばどうかしら。お金で言えば積み立てしてゆくといいことだけど。そうして自分に(欲求を充たすための)時間を与えること、想いを与えることが大事じゃないかしら。つまり、期待するのも自分で、その期待を充たすのも自分だということ。その中にこそ、生きてるふりではなく、本当の生きてる実感があるのではないかしら・・・>と指摘する。

ここで、昔の夢で何ですけど・・・と前置きし、彼夢を語る。どのくらい遡るの？と訊くと、幼稚園くらい・・・と彼返答。《夢：屋上にいた。塔屋があって、はしごがある。そこを昇ろうとすると、上にロボットみたいな、マネキンみたいな女が(自分を)見下ろす恰好で睨んでいる。ガラス玉の眼で、ひびわれている。無気味・・・》、そんな夢だったと、彼語る。<周囲の誰彼が自分とは無縁なもの・異質なものとして感じられるということはなかったかな？時折こどもって思うことがあるのよ、自分の親は本当の親じゃなくて、本当の親はどこか別なところにいるんじゃないかって。そういう風に想像したりすることなかったかなと聞くと、なかったと彼素っ気なく返答。籠の鳥が飛べないように羽根を切られるみたいに、想像力の羽根を切ったかしらね・・・>と示唆。すると、兄貴の方がむしろそうだ、自分は高校卒業してから家を出たが、兄は家にしがみついたと彼語る。<そう、確かに飛んだよね、

でも落ちた?! 夢の中でも同じこと、通せんぼされて、ここ止まりになってるわね。…感受性が鋭敏というのは、豊かでもあるということかも知れない。味方にできればいい。それが、まるで爆弾みたいに危険なものとして扱えられていて、持て余す。だから必死になって根絶やしにしようとする。そして鬱的になる。根絶やし寸前、成功したかに見えたのに、結局駄目ってことに…。表現者、詩を書く人、絵を書く人、俳句読む人、皆誰でもが自分の中のそうしたものを飼い馴らすためにこそ「表現」を必要としたということはないかしら。自爆しないためにね。そんな人いたかしら、いるかしら、出会ってみたいと思わないかしら? >と訊く。「表現するもの、ないんですね」と彼ポツリ。<そうだとしたら、ここで夢を語ったりはしないはずだが…>と示唆すると、それは今日何も他に話すことがないからでとか、そうしなければ先進めないからで…と彼言い訳めいたことをあれこれ並べる。[やや不真面目っぽい印象あり。] <詩を書くのも、或は小説でも絵でも俳句でも、誰しも皆それは同じ。そんな風に「自分」を何とか貫こうとしている。いい詩を、いい絵を描きたいとかね。それに命を賭けるなんて人もあるでしょうが、でも大事なものは作品、つまり結果なのじゃなくて、そうすることで自分を貫くことが辛うじてできるということなんじゃないかしら。‘ひび割れたガラス玉の眼’、そこにはバラバラの自分しか映らない。だけど、表現しているうちに何とかまとまりのあるものとして「自分」が見えてくる。そういうことじゃないかしら。あなたはそれを知ってて知らないふりしてる、あるいは知らないで知ってる。どこか‘臍曲がり’、あまのじゃくかな? ここで‘ひび割れたガラス玉の眼’、それが誰であったのか何であったのかはもはや問えないけれども、今自分がそれそのものになっているとしたら、それが問題。…生きることで人は醜態を晒すことってあるでしょ? ぶざまに生き難さに躍起に抗っていたかずきさんがいた。もう少し父親が生きてくれたら、それをもっとあなたに分からせてくれたでしょうね。今ではもう何やら過去という「ジクソープズル」に空白の穴ぼこがあちこちあるみたい。人は過去を忘れてこそ生きてゆけるということがあるかもしれない。でも今あなたは思い出そうとしてるわけで…。過去は懐かしい、でもそこに「苦痛!」が混じる。そして振り返りを邪魔する。どうしたらそこへ(懐かしいという想い)へ戻って行けるかしら…>と示唆。「手が器用だ」と母親に言われたことがあったと、彼振り返る。リンゴの皮剥きやらなんだとか…。<そうなのね。「己の生きてる証し」を欲しがるといのはいじましいって、そんな逆らう思いってなかったかしら? やはり臍曲がりかな? 自力の自分を誇りにすると同時に、でも「おまえ生きるのが下手だよなあ」って自分に言ってる自分がいたかしら? 自分に逆らい抗うもの、それが敵とも限らない、自分にとってそれを味方にできれば心強いものかもしれない。その自分の‘声’に耳を済まして聞けたらいい…>と指摘して終える。



メモワール・その10 分析患者:はやと 男性 24歳

或る分析セッションでのこと。奈良の実家に帰省した折、一応親の言いなりに従うことで、そのお返しに400ccのバイクを買わせる交渉にほぼ成功した、と満更でもない顔で報告する。父親は依然として自分は間違っていないと何事にしても強硬な態度。同様に、母親もお前なんか

はまだ負けないという気概を示す。そういうのを目にすれば、どうしようもない！という諦めに浸るしかない。職場で保護観察の審理面接に臨んだが、またもや「どうしようもない！」という諦めと苛立ちを彼語る。＜どっちが？あっちが、こっちが？それって‘役不足’の嘆きかしら。総てが「どうせ俺は次男坊だから・・・」に帰せられるようだ・・・。どうせ(誰にも)聞いてなんかもらえない・・・せめて母親に対して、父親と同じぐらいの力を持てたら・・・」という思いがのぞかれる。しかし、いつまでもただの‘次男坊’の位置に甘んじていられるわけでもないだろうし、いつかどこかではやとさんも‘長男的もしくは父親的’な存在にならねばならないはず・・・>と示唆する。一対一だとまだいいのだが、保護司さんが傍らにいと、「どうせ俺なんか・・・」と、ひどく気持ちが挫かれる、と彼語る。＜多少でも面談中おもしろいと感じる思いがあるなら救いはあろう。ともかく対象者を相手にしながら、彼(彼女)に聞ける、言わせることができる立場に踏みとどまるしかなさそう。そこでは、他にあなたの代わりにしてくれる人は誰もいないのだから・・・>と示唆。

‘模範的国家公務員’の枠内に立て籠もり、もはや‘透明人間’の心境なんだとか。誰彼のまなざしも、その矛先を交わし、うまく何食わぬ顔に徹しているとか。自分の「土俵」は仕事の外に移した。小説家志望だとか。最近読んだのは、「ジョン・アービング」の小説。「これは適わない！」といった感想。その一方で、保護観察事例は、かなり熱心に読んでいらしい。職場では事例にそれほどの時間を割くのは異端。そんなふうにして密かに「語り手としての目」を養おうとしている、と彼語る。＜なるほど、「どうしようもないや！」で匙投げかけてた保護対象者たちを相手に、ともかく表現を通してその生の実態に肉薄する面白さが今や彼の中で勝とうとしていると言えるとしたら、それもいいわね・・・>と示唆。

職場の同僚に対する鬱憤。今年定年退職する課長の酒の席での愚痴話を持ち出し、日頃抱いている、自分の「こいつら公務員は、どいつもこいつも腐っている！」という悔りの感情を正当化する。＜でもね、今のはやとさんは仕事を押し付けられるとか、責任を肩代わりさせられるとか、まるで職場で自分は‘いじめられっ子’だと言わんばかり。かつてボクシング業界でいうところの「咬ませ犬」にもさせられた過去に比べれば、今は結構なご身分ではあるとも言えるけどもね・・・悔しさは同じかな・・・>と示唆。直接の上司のタカギさんは頭が切れる。一を言えば、十も百も返ってくる人で、だからとても勝ち目はない。だから「はぐらかし戦法」で、矛先を何とか交わすだけが精一杯なんだとか。例えば、審理面接中にいきなり入って来て、「どうしてるか、見に来た」と言ったので、「別に・・・」と答えて、トイレに行く振りして席を立った。彼も仕方なく、退室したとのこと。＜人を動かす力としての言葉を洗練させることだわね・・・>と指摘する。そして、＜十年前の家庭状況がそのまま繰り返されている。‘聞く耳持たぬ両親’、それにどんなに悔しくとも黙らざるを得なかったはやとさん。しかし黙ったままでよしとする自分でしかないとなれば、それは怠慢とも言えないか。「こいつに何を言ってもしょうない・・・」という諦めにむしろあぐらかこうとするはやとさんがいないかどうか。でも実際、本当は何が言いたいのか、聞かれても聞かれてなくとも、自分をどう把握しているのかが問われるはず・・・>と示唆。

職場では、開き直って‘小説家’になったつもりで、後は総て馬耳東風。だが「過去の情^{なさ}

けない自分」がつい想起される。父親には聞いてもらえないどころが、殴られるのが落ちだった。母親を一度徹底的に言い負かして、土下座させたこともあるが、それで済んだわけでもない。不幸、例えば自殺でも如何なる悲惨な状況でも、書き方次第では見られるものになる。そのことで救われる。「見るに耐えない自分」が「見られる自分」になる。不幸をも、それを笑える自分になることで救われる、と彼主張する。

＜ここで‘救われる’という意味が、即ち不幸に鈍感、あるいは無感覚になることであるらしい。つまりは傍観者の姿勢とは言えないかしら。腹話術師（現在の自分）がダミー（過去の自分）を操るといった連想が浮かぶんだけどでも…。いずれにしても、時間的空間的にそれぞれの自分の巧妙な分裂工作かしらね…>と示唆。とにかく現在の職場で彼は‘幽霊’になるらしい。但し、保護観察事例は自分の肥やしになるし、小説のネタにもなる。とにかくおもしろいと思っているという割り切り方。その為にも分析が自分には必要なんだとか。＜耐えられない現実における自分の空間的処理だわね。オンとオフの取り外しが、自分次第で自由自在といった感覚でいる。‘連結’の操作といったこと、すなわち何と何、誰と誰、どことどこといった関連性だが、まるっきり自分がそれらを掌握し切ってもいるような錯覚に陥ってはいないか。その結果、その繋がりから零れ落ちて「消え去るもの」が果して何なのか、それがてんで考慮されていない。一瞬案じられたが…>と示唆。

彼の言うところの‘小説家志望’とは、「自分の不幸を切売りする為」なんだと告白する。＜なるほど、「不幸の増殖」か、それとも「自己憐憫の誘発」か…。何しろそれで金を稼げるなら…というだけの話で終わってしまいそう…。人を動かすための、自分が動けるための「言葉」の獲得を通して、かつて‘踏みじられた’彼の「名誉」の回復が意図されているのではなさそう…。現状は、ただやはり「こいつら、相手にするだけ馬鹿みる」といった逃げではないか。守るべき名誉もへったくれもない。そりゃそうだ、孤立無援の孤軍奮闘じゃ、余りに寂しい。そしてただ辟易する自分を持て余しているだけの話にも聞えるが…>と示唆。

職場では誰も自分のこと、まともに聞いてくれる訳ではないという失望。そして、どうせここに長居はしない。10年たったなら小説家として自立を考えている。組織の中で食われて、一つのコマとしてどうされようと、それは一種のダミーで、自分じゃないと思えばそれで済む。人の輪の中で生きられるかもという期待もあったが、残念ながらそうはならず、でも今のままの自分でも使いものにならなくもない。それは飽くまでも小説を書くこと。誰をも当てにせず、一人でやる覚悟に今執着すると彼語る。＜確かに、そうなれば、誰のお陰でもなく、自分一人の手柄にして、長年の宿敵である自らの「無価値感」を払拭できるか知れないかしらね。誰も力などにはなってくれはしない、むしろ邪魔ばかりしてくれるという恨みは、総ての迫害を「ああ、やっぱり…」と過去の自分に決して耳を貸すことのなかった親の再現と自己の恨みの新たな正当化へとつなげて処理されてしまう。「お前なんか何が出来る！」というこき下ろし（羨望）を刺激剤に、奮起するはやとさんがいる。親に負けず劣らず、他人の声に耳貸さずの‘つんぼ’になる道を選ぶのかな。‘つんぼ’のはやとさんが‘唾’^{おし}になるとは限らないが、作家活動が相当困難になりはしないかと想像される。誰も振り向い

てなどくれない、聞いてなんかくれはしない、誉めてくれるわけもない、そんな無反応な中に果たしてどこまで留まることが出来るかしら。何故それが可能だと信じるのか。はやとさんらしい‘悪あがき’ではないか。俺はどっかで大物になるといった肥大化した自負がどうやら曲者かな・・>と示唆。

ここで芸術家の悲壮な覚悟、総てを投げ打ってそれに掛ける生活の潔さを彼云々する。くしかしどこまでもいじましさとひもじさを引きずって、そこに居直る自分への浅ましさに辟易せずにいられるものかと思うが・・>と示唆。彼のは「私怨小説」というジャンルになるらしい。腹いせ、面当てということ。誰にも迷惑掛けないと豪語するが、その‘波及効果’について責任を一切否定する。つまり自分の小説のせいで誰かが死のうと何しようとして我関せずといった開き直り。つまりは恨みの増幅。そして‘餓鬼’を一人でも増やすこと。そうすれば、自分の中の‘餓鬼’が表立って断罪されずに済む。或いは良心の呵責に晒されずとも済むということらしい。癒される、報われるということが一層遠のいてゆくといった印象を指摘。＜要するに、青年期の反抗みたいで結構‘青臭い’といった印象は拭いようもない。「私怨小説」の読者層と語らって、おとな的分別なり諭しなりをせせら笑い、徹底的に粉碎しようとしている。悪魔に魂売ってでもということらしい。改めて両親(大人一般)を敵に回して、宣戦布告といったところ。そして‘負けなくてはならない’運命が待っている！ どういう形で‘負けるか’である。その結果どういう慰めが待っているのか、興味深い・・>と示唆。

さらに、<かつて「愛されることなく一生終わるとしたら悲惨だ」ということを語っていた訳だが、どうもそれも総て棚上げということになるみたいね・・>と示唆すると、国家公務員だから結婚したいと言う女性などはダメだからと、結婚も当分延期の由。＜欲しがられては困る。或いはヤバイと尻込みする背景に、彼の屈折した‘欲しがりたい’思いが見え隠れする。これからは、自分一人で自分を「ヨイショ」しなくちゃならない訳で、誰も一緒に「ヨイショ」してくれないとしたら、実は心細くはないか・・>と示唆。今(或る小説を)書いてるんだけど、全然お粗末で見られない。誰も読んでもらえる人がいない、と彼嘆く。＜‘恰好の良い自分’じゃなくては、或いは‘恰好の良い自分’になる迄は、人に見てもらえない(人に聞いてもらえない)という意固地な気負いがあり、そうなる一人で大きくなるしか道はないということ。力が欲しいという足掻き、それも言葉の力への傾倒が顕著なのは興味深い。それもその昔、親に口をとんがらせて、口答えしたのに取り合ってもらえなかった恨みを晴らさんとする、まるで‘敵討ち’といった趣きがある。いずれにしても、それはどういう「力の証明」となるのか、おそらくはやとさんの一生掛けての課題だわね・・>と指摘して終える。

《 謝辞:「メモワール」にご登場いただきました元分析患者の皆さま方へ。

その昔々、ご一緒した懐かしい方々！ よくぞお付き合いいただきました！

改めて深く感謝申し上げます。ほんとうにどうもありがとう！！》
